

《公開シンポジウム 2023-1 報告（月例サロン通算 322 回）》

成田十次郎先生を語ろう！

D. クラマーを日本に紹介した教育者・研究者・実践者

柴田 宗宏 (一社) 日本ウォーキングフットボール連盟副会長／読売サッカークラブ初代監督代行
真田 久 筑波大学特命教授・名誉教授／NPO 日本オリンピックアカデミー会長
竹下 誠一 (一社) 高知県サッカー協会副会長／元高知放送報道制作局長
中塚 義実 (※コーディネーター兼) NPO サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭

主 催：特定非営利活動法人サロン 2002

後 援：筑波大学蹴球部、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ、(一社) 高知県サッカー協会

協 力：日本サッカー史研究会、日本ヤタガラス協会

日 時：2023 (令和 5) 年 8 月 27 日 (日) 14:30～17:00 (14:00 受付開始)

注) 17:00～19:00 同会場で懇親会

会 場：筑波大学附属高等学校「桐陰会館」 〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1

注) オンラインでも参加できます (参加申込された方に Zoom の URL をお送りします)

登壇者：柴田 宗宏 (一社) 日本ウォーキングフットボール連盟副会長／読売サッカークラブ初代監督代行

真田 久 筑波大学特命教授・名誉教授／NPO 日本オリンピックアカデミー会長

竹下 誠一 (一社) 高知県サッカー協会副会長／元高知放送報道制作局長

中塚 義実 (※コーディネーター兼) NPO サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校教諭

参加費：1,000 円 (サロン 2002 ファミリーは無料です)

参考資料：2008 年 3 月例会報告「成田十次郎先生にきくー高知・日本・ドイツのサッカーとトリムカップ」

https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2008/2008-3.pdf

<公開シンポジウム 2023-1 参加者【最終版】 計 67 名 (敬称略)>

■対面参加 (計 42 名) ※懇親会参加は 29 名 (うち学生 7 名)

※サロン 2002 ファミリー (11 名) ... 池田駿介 (山梨大 4 年)、石原俊秀 (榊パルカ)、大河原誠二 (筑波大附高 OB)、熊谷建志 (少年サッカー指導者)、小松俊介 (筑波大附高美術科)、嶋崎雅規 (国際武道大学)、清水諭 (筑波大学体育系)、染野忍 (筑波大学蹴球部 OB)、茅野英一 (かながわクラブ)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、吉原尊男

※サロン 2002 ファミリー外 (31 名)

・登壇者… 真田久、柴田宗宏、竹下誠一

・筑波大学蹴球部…小井土正亮(監督)、阿部悠真・家田航輔・岡田俊祐・林田息吹・廣畑晴揮 (4 年)

・筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ… 上野二三一、大串哲朗、西塚祐一、堀謙二、

松本光弘、山本英作（高知 FA）、吉田優輝（大学院）

注）染野、中塚はサロンファミリーで、小井土は筑波大学蹴球部でカウント

- ・日本ヤタガラス協会… 中村統太郎
- ・日本オリンピック・アカデミー… 今井明良
- ・日本サッカー史研究会… 国島栄市、中村年秀、山内博之
- ・自由学園サッカー部 OB／南沢蹴球団… 菊池秀平、牧野慎也
- ・小石川高校サッカー部 OB… 越部良一、堀野貞昭、和田昌昭
- ・湘南高校サッカー部 OB… 関佳史
- ・筑波大学附属高校蹴球部 OB… 菅原博、留岡伸一 注）大河原はサロンファミリーでカウント
- ・成田家… 成田瑛智子、成田慈子

■オンライン参加（計 25 名）

※サロン 2002 ファミリー（10 名）… 笹原勉（台湾）、張寿山（英国）、本多克己・賀川浩（神戸）、小池靖（長野）、土谷享（高知）、宇留間範昭・桑村裕次・鈴木崇正・本郷由希（東京）

※サロン 2002 ファミリー外（15 名）

- ・筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ …石渡晋、藤原明夫、松本一雄（高知 FA）、本木幹雄、浜中邦興
- ・日本ヤタガラス協会… 生熊みどり、在仲靖二
- ・サッカージャーナリスト… 貞永晃二、
- ・自由学園サッカー部 OB／南沢蹴球団… 脇田宗治
- ・研究関係… 杉本厚夫（子ども未来・スポーツ社会文化研究所代表）、花内誠（九州産業大学）、寶學淳郎（大阪成蹊大学）、師岡文男（上智大学名誉教授）
- ・その他… 翠川洋介
- ・成田家… 成田愛

主催者挨拶（中塚義実）

皆さんこんにちは。今日はたいへん暑い中、NPO サロン 2002 主催の公開シンポジウムにお集まりいただき、まことにありがとうございます。会場には約 40 名の方にお集まりいただき、成田先生の奥様とお嬢様もご参加くださいました。ありがとうございます。

オンラインでも約 20 名の方が参加されています。台湾や英国からの参加もあります。最年長ジャーナリストの賀川浩さんも、本多克己さんとともに神戸からご参加くださっています。

「成田十次郎先生を語ろう！—D.クラマーを日本に紹介した教育者・研究者・実践者」と題するシンポジウムを企画いたしました。成田先生についてはサッカー関係でご存じの方、研究面でご存じの方、あるいは高知県とのつながりでご存じの方と、いろいろいらっしゃると思います。

去年の 8 月 7 日に亡くなられた成田先生を「偲ぶ会」が、2023 年 5 月に高知で行われました。そのときに集まった方々で、成田先生のことをもっと多くの方に知っていただく、そして日本サッカー殿堂に推薦しようという話になりました。このシンポジウムはその一環でもあります。

筑波大学、その前身の東京教育大学、東京高等師範学校関係者で日本サッカー殿堂入りされているのは、スライドの 5 名の方々です。日本にサッカーをはじめて紹介した坪井玄道さん、日本サッカー協会立ち上げの中心的存在であった内野台嶺さん、学校教育へのサッカー導入に多大なる貢献をされた多和健雄さん、小澤通宏さんはプレイヤーとして東洋工業全盛時代を築き上げ、高田静夫さんは日本人最初のワールドカップ・レフェリーとして審判の世界でご活躍されました。これらの方々が殿堂入りされているわけですが、この他にも皆さんに知ってほしい方がたくさんおられます。成田十次郎先生もそういった方の一人であります。

申し遅れました。私はこのシンポジウムの主催団体である NPO 法人サロン 2002 の理事長を務めます中塚義実と申します。筑波大学附属高校の教員として昭和の終わりに着任し、異動もなく 36 年間も勤め続けるうちに、附属高校蹴球部が今年 100 周年を迎える年になりました。主催者挨拶とシンポジウムの概要説明を合わせて話をさせていただいています。

はじめに、成田先生に関係の深い方のインタビュー映像を見ていただけたらと思います。

成田十次郎先生を語ろう！

D.クラマーを日本に紹介した教育者・研究者・実践者



公開シンポジウム案内チラシ

日本サッカー殿堂—東京高師・東京教育大



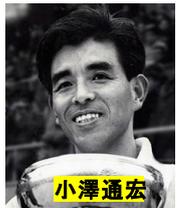
坪井玄道
市川市立市川歴史博物館所蔵



内野台嶺



多和健雄



小澤通宏



高田静夫
@studio_aupa

日本サッカー協会 HP

インタビュー映像①【田嶋幸三氏】

皆さんこんにちは。日本サッカー協会会長の田嶋幸三です。

本来であれば、成田十次郎先生を偲ぶ会、真っ先に駆け付けなければならない立場です。いま公務のためカタールにおります。この偲ぶ会に参加できないことをお詫び申し上げます。

なぜ真っ先に私は馳せ参じなければならないか。成田先生が東京教育大の大先輩であるということ。そして、筑波大学の3期生であった私は、週に一回来られる成田先生のサッカーの指導を楽しみにしていたということ。このことは私のサッカー人生を変えるきっかけとなりました。

説明の必要はないと思いますが、成田先生がケルンスポーツ大学に留学されているときに、デットマール・クラマーさんの招聘に大きな動きをされたこと。その当時の野津会長の文章からもそれを読むことができました。そして、私は週一回だけの成田先生のご指導が楽しみで仕方がありませんでした。厳しい、そして核心を突く我々への一言。本当にこういう方が、頭が切れて、本当にするどい指導をされる方なんだと初めて経験しました。私はその時に、これはドイツで学ばなければ、ケルンのスポーツ大学に行かなければと思ったことを覚えています。そして、運よく同じ道をたどることができ、西ドイツで学ぶことができました。私は成田先生と同じような体育史ではなく、指導者養成を学びました。帰国後、岡野さん、川淵さん、平木さんに指名していただき、指導者養成の改革、若年層の育成に関わることができました。これも、西ドイツで勉強してきたからこそだと思っています。そしてその後、技術委員長やU-17の監督、そして専務理事、会長と、サッカー界で奉仕できたことは成田先生のおかげだと思っています。

本当は、昨年のカタール・ワールドカップのドイツ戦。成田先生にお見せしたかった。まさか日本がドイツに公式戦で勝つときがくるとは思っていなかったんじゃないかな。成田先生が一番その差を感じてらっしゃったんじゃないかと思っています。ぜひそのニュースが天国に届いていたらというふうに思います。

私は、常に成田先生と同じように世界を目指して日本のサッカーを強化していこうと努めてきました。まだ、私たちの本来の目標である、「ワールドカップで優勝する」ということはかなっていませんが、この気持ちを忘れることなく、今後も日本のサッカーの発展に尽くしてまいります。成田先生、天国から見守ってください。私たちはもっともっと強い日本代表になっていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

そして、今日出席の皆さま、成田先生の話をとくさんしてください。そして、大いに酒を飲み、サッカー談義にふけてください。それが一番、成田先生の供養になるのではないのでしょうか。本当に今日出席できなかったことを皆さんにお詫び申し上げます。今後も日本サッカーの発展に皆さん協力してください。そして、一緒に頑張りましょう。

皆さん今日はありがとうございました。

中塚：おなじみの日本サッカー協会（JFA）会長、田嶋幸三さんです。この映像は今日のために撮影されたものではなく、5月の「偲ぶ会」で流されたものです。

もうお一方、こちらも皆さんおなじみの方です。

インタビュー映像②【川淵三郎氏】

成田先生、生前は本当にいろいろお世話になりました。ありがとうございました。この場を借りて、厚く御礼と感謝を申し上げます。

先生と初めて会ったのは1960年、デュイスブルグのスポーツシューレでしたよね。クラマーさんの通訳として来られて。その頃僕は成田先生のごことはあまり存じ上げなかったのですが、「あの人どういう人？」と聞いたら、「東京教育大学のサッカー一部で関東大学リーグを優勝したことがあるんだよ」。そして、「ケルン大学に留学して勉強しておられるんだ」と聞いて、大した先輩がいるんだと、初めて成田先生を知りました。

先生がクラマーさんの招聘に関わって、この人こそが日本のサッカーを強くしてくれるということからクラマーさんとの関係ができたわけで、そういった意味では本当に成田先生が日本サッカーをレベルアップさせた、本当の功労者だというふうに思います。

それ以来、60年以上、成田先生とお付き合いさせていただいている間に、成田先生の怒った顔や不愉快な顔を一回も見ることがありません。本当にいつも思いやりのある優しい笑顔でした。

また、忘れられない思い出の一つに、2002年にワールドカップが終わった後、高知県で国民体育大会があったんですね。その時にいつも僕らサッカー協会関係者と現地のサッカー関係者でOBの試合するんです。僕はあまり走れなくて、サッカーの試合をするような年でもないしと思っていたのですが、高円宮殿下が来られているので、「ぶちさん、ちゃんと着替えてやりなさいよ」と言われて、しょうがなくゴールキーパーをやったんです。そのときに成田先生がセンターフォワードにいて、僕のところにバックパスがきて、ドリブルして前の方に行ったら、成田先生が来られて僕のボールをカットしようとしたんですね。まあ奪われることはないだろうと思ってそのマークを外そうとしたらカットされてですね、点を決められました。成田先生は大学時代、関東大学リーグも優勝し、いろんなところでサッカーをやっておられるわけですが、具体的に試合をしたのはその時が最初で最後なんですね。だから、僕としてはもう悔しかったけれど、まあ地元の成田先生が点をとったんだからいいかってまあ自ら慰めたんだけど、本気で抜こうと思ったら取られちゃったということで、その思い出は忘れられませんね。

成田先生は釣りが大好きで、とくにあゆ釣りが大好きで、そんな話をよく一緒にしました。「じゃあ今度あゆを送ってあげるから」と言って、いつもあゆを送っていただきました。何でもやるんだなど。僕なんかあゆつりなんてまるで興味も関心もなかったのも、これが成田先生が捕られたあゆということで本当においしくいただいたことが思い出として残っています。

いずれにしろ成田先生の一生は、僕らが知っている限りにおいては日本サッカー界の発展に本当にご尽力いただいて、あの素敵な笑顔と説得力のある話し方で、多くの人をサッカーの虜にした、ということなんだろうと思います。そういった意味で、僕がいまあるのも、そういう成田先生の、教えを守ってというか、自然に背中を見ながら育ったという言い方の方が正しいと思いますけども、成田先生なかりせば、という感じがあって、本当に今まで貢献されたことに対して、心からこの場を借りて御礼を申し上げたいと思います。

心からのご冥福をお祈りいたしております。

中塚：川淵三郎さんのコメントでした。お二人のインタビューを最初に見ていただきました。

公開シンポジウム「成田十次郎先生を語ろう！」

中塚：ここからシンポジウムの中身に入っていきたいと思います。主催は「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」を“志”に掲げるNPO法人サロン2002です。後援は、成田先生を日本サッカー殿堂に推薦するため連携を図っている筑波大学蹴球部、その同窓会である茗友サッカークラブ、そして高知県サッカー協会です。日本サッカー史研究会、日本ヤタガラス協会には告知面でご協力いただきました。

登壇者をご紹介します。順に前方にお進みください。

柴田宗宏さんです。成田先生が東京教育大学で監督をされていた時のキャプテンで、埼玉県の教員を長らく勤められました（拍手）。

竹下誠一さんです。高知県サッカー協会副会長としてご尽力されてきました。竹下さんはテレビ局に勤務されていたことから、先ほど見ていただいた田嶋さん、川淵さんの映像は竹下さんが制作されました。5月の「偲ぶ会」も、中心となってご尽力されました（拍手）。

そして真田久さんです。筑波大学特命教授・名誉教授で、日本オリンピックアカデミーの会長をされています。研究分野で成田先生の後継者としていろんなことをなさっています（拍手）。

進行役兼話題提供を中塚が引き続き務めます。どうぞよろしく願い申し上げます（拍手）。

お三方から自己紹介を兼ねて、成田先生とのご関係、さまざまな側面をお持ちの成田先生の思い出を、柴田さん、竹下さん、真田さんの順にコメントをお願いします。

柴田：はじめまして、ご紹介いただきました柴田宗宏と申します。歯と歯のかみ合わせが悪くて、上手くしゃべることができず、聞きづらい点があるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

私と成田先生という意味ではですね、大学4年生のわずか1年間だけなんですけど、監督をお願いいたしました。それから、私ども夫婦の仲人を成田先生ご夫妻にお願いをしております。それから、読売サッカークラブができました時に、コーチとして、成田先生から派遣をして頂きました。私の人生におきまして、多大な影響を及ぼしていただいた先生であります。非常に簡単ではありますが、初めの挨拶と変えさせていただきます。一つ宜しくお願いいたします。

竹下：竹下誠一と申します。今日は成田先生のご出身地、高知県からやってきました。

成田先生との出会いは、1996年に筑波大学を退官されたのちに高知女子大学の学長として高知に戻られて以来、30年ほどとなります。そのころ私は高知放送の現役でしたので、メディアとしての関わりもありましたし、のちに成田先生は高知県サッカー協会の会長をされましたので、節目節目でいろいろなお付き合いをさせていただきました。今から先生の足跡をたどると思いますが、日本サッカー

成田先生はどのような方だったのか

1. サッカー人

- 1)元日本代表候補選手 ... 努力の人
- 2)D.クラマーを日本に紹介... 今日の日本サッカーの基盤をつくる
- 3)東京教育大学監督 ... 民主的運動部の先駆け
- 4)読売クラブ初代監督 ... プロサッカーの先駆け
- 5)高校サッカー首都圏開催 ... 低迷期の日本サッカー活性化
- 6)高知県サッカー協会会長 ... 高知国体/トリムカップ

2. 研究者・教育者 ... 近代ドイツ体育・スポーツ史研究 国際的な学会組織のリーダー

3. 国際人・土佐人・家庭人 ... 家族愛、郷土愛、人類愛

4. 誠実な求道者 ... 杉正俊著『郷愁記』とともに

の節目には必ず、なぜか成田先生が関わっていらしたのは言うまでもございません。日本サッカー殿堂入りを目指して我々も尽力したいと思っておりますので、今日はよろしくお願ひします。

真田：筑波大学の真田久と申します。私は昭和50年に筑波大学体育専門学群に入学いたしました。2年生の時、昭和51年に成田先生の体育史の授業を受け、その翌年に体育史の研究室に入りまして、成田先生から卒論、修論、博士論文等の指導を受けてきた者であります。もう46～7年になりますが、先生にはずっとお世話になりました。

ドイツのスポーツ史研究者に会いますと必ず、「Dr.十次郎成田を知っているか。彼は完璧なドイツ語を話す素晴らしい研究者だ」と言われておりました。その末弟子にあたるということを私は誇りに思っておりました。今日は成田先生の体育・スポーツ史研究、体育・スポーツ学への貢献について紹介させていただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

中塚：進行役の中塚は、親の代から成田先生にお世話になってきた者です。私の仲人も成田先生ご夫妻です。このあたりのご縁についてもものちほど紹介させていただきます。

シンポジウムの進行ですが、2010年に成田先生が叙勲されたときに作られた映像を時代ごとに見て、スライドでの補足とお三方からのコメントで進めていきたいと思ひます。会場にもオンライン上にもコメントをいただきたい方は大勢おられますが、おそらく時間がきつきつになることが予想されます。申し訳ありませんがコメント等は、お手元のアンケートにお書きいただければと思ひます。

オンラインの皆さま、音声の不具合等ないでしょうか。何かお気づきの点があればチャット欄にコメントください。

それでは、成田十次郎先生のあゆみ①生い立ち編。まずは映像でご覧ください。

1. 成田十次郎先生のあゆみ①生い立ち編（～18歳）

紹介映像①

成田十次郎は、1933年、昭和8年1月1日に、高知県高岡郡、現在の仁淀川町で教員をしていた山中政好(まさよし)、貞寿(さだじゅ)ご夫妻の5番目の末っ子として誕生しました。8年1月1日を足して十、次男だったことから十次郎となったとか。ほどなく、両親の故郷、池川町へ移ります。池川では、鮎のことをアイと呼び、十次郎少年は近所でアイ捕り名人の十ちゃんと言われていました。ちなみに、80が近い今年になっても、アイ捕り名人の十ちゃんは変わっていません。

昭和20年、終戦を迎える4か月前に、旧制城東中学校に入学、そして新制の追手前高校となった1年の冬(注)に、運命的なスポーツと出会います。サッカー部の同級生とよくボールを蹴っていた山中に、卒業試験でいない選手に代わり、試合に出てくれと頼まれたのです。県内の大会にフォワード、右のウイングとして出場した山中は、何と決勝戦で得点し、チームを優勝に導きました。

これが、成田十次郎のサッカーの原点となりました。

成田氏「サッカーでね、1時間余り、1試合走り続けるでしょ、で1日に2試合は必ずやりましたからね、あの頃は、2試合も全力でやって、しかもいい成績を上げた。とてもサッカーが、自分に訴えるものがありましたね。」

成田十次郎の人生に大きな影響を与えた一冊の本があります。『郷愁記』。哲学者、杉正俊がドイツに留学し、結核のためにスイスとドイツで療養した間の日記です。

軍人を目指した山中少年は、終戦で目標を失い、さらに学校でのいじめなどもあって、行き場をなくしていました。「人生の真実の姿は、達することが出来ない理想を求めて、ただひたすら努力を続けることにある」。『郷愁記』にあるこの言葉が、山中少年を奮い立たせました。

1951年、追手前高校を卒業した山中は、東京教育大学、現在の筑波大学に入りました。

注)映像のナレーションでは「新製の追手前高校となった1年生の冬」とあるが、正確には「高知新制高校1年生の冬」である。山中(当時)が昭和20(1945)年に入学した旧制城東中学校は5年制の男子校であったが、1947(昭和22)年に新製の併設中学校が設置され1年生の募集は停止。山中は高知新制高校併設中学校3年生に編入する。1948(昭和23)年4月に新制高校に入学した当時、学校名は高知新制高等学校であり、サッカーと出会った1年の冬もこの名称である。「1949(昭和24)年の8月、市内の2つの公立男子高校、3つの女子高校の生徒が「くじ」を引き、追手前高校、小津高校、丸の内高校の3校に再編され、男女共学となりました。」(『サッカーと郷愁と』p.41)。追手前高校となったのは高校2年生の2学期からである。

■はじめて「人を教えた」経験

中塚：ここで1つエピソードを紹介させてください。映像にはありませんでしたが、成田先生が高校3年生の時、初めて人にサッカーを教える経験をなさっています。高校野球で有名な土佐中・高にサッカー部ができる時の話です。土佐中・高の方々は、同じ市内の追手前高校3年生の山中十次郎少年に指導をお願いします。逆に言うと高校3年生の山中さんは、同じ高校生にサッカーを教えに出かけたというものです。

「初めて人を教えた経験は私の人生にとっては画期的な出来事でした。」

スライドの新聞記事は、2009年1月から12月まで高知新聞で連載された「サッカーと郷愁と」という連載記事で、後日、同名で不昧堂出版から単行本となりました。そこには、「わずか半年ほどでしたが、私はこの時の部員たちの気質や技をいまでもよく覚えています」「現在私の良い話し相手である中塚頼彦君は、当時上手すぎる中学生で、紅顔の美少年でした」と書かれています。

この「中塚君」が私の父親です。私がいまここに座っているのは、父親の代からお世話になっていることが原点にあります。



生い立ち編は高知の話でした。竹下さん、土佐中・高のサッカー部創設のころ、あるいは成田先生が育った池川町のことなど、補足コメントをいただけますか。

竹下：高知県は、当時もいまもあまりサッカーが強い県ではございません。いまお話しがあった土佐高校は私立の進学校です。追手前高校に遅れて土佐中・高にサッカー部ができ、そこに成田、旧姓山中少年がなぜか教えに行くという、いまではとても考えられない話です。そこに中塚さんのお父さんがいたということですね。

実はこの関係が後に、高校サッカー首都圏開催という大きな話にもつながっていきます。

先生のご出身地の池川町は、合併でいまは仁淀川町になっていますが、映像にございましたとおり、山と川に囲まれたいいところがございます。先生は故郷愛と申しますか、出身の池川というところを非常に愛しておられた方で、高知に帰られる度に、先ほどの写真にあったとおり、あい（鮎）を取りに行かれました。結構ご高齢になっても行かれるものですから、帰られる度に、家まで帰って来られるかと奥様が心配されておりました。高知に帰ると少年のような顔になられる方でした。

中塚：ありがとうございます。高知時代のエピソードでした。

2. 成田十次郎先生のあゆみ② 東京教育大学時代（18～22歳）

■日本サッカーの宗家

中塚：山中青年は東京教育大学に入学されますが、この学校、いまの筑波大学は「日本サッカーの宗家」であります。釈迦に説法かもしれませんが大事なところなので、スライドで押さえておきたいと思えます。

明治期以降、海外のスポーツが日本にやってきました。外国人居留地にクラブが生まれ、野球やサッカーなどの近代スポーツが紹介されます。学校を中心にスポーツが展開していく背景には、教育制度が整えられ「体操」が導入され、体操を教える先生を育てる学校、「体操伝習所」が設置されました。これがいまの筑波大学体育専門学群につながります。

この学校に嘉納治五郎が校長として着任します。柔道の創始者、アジア初のIOC委員、大日本体育協会、いまの日本スポーツ協会を創設し、多くの留学生を受け入れた国際人もあります。この方が東京高等師範学校（東京高師）の校長となったのが1893年のこと。その後20年余りにわたって校長を務めました。東京高師の校長は附属学校の校長でもあったので、本日のシンポジウムの会場である筑波大学附属高校の校長も長らく務め、今日の学校教育の骨格となることを東京高師やその附属学校で形作ってきました。部活動というシステムもその一つです。

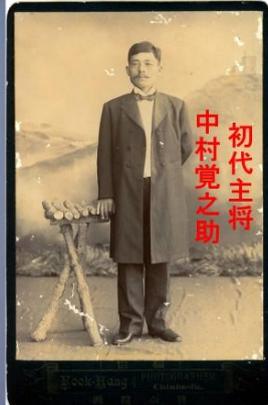
東京高師蹴球部初代主将の中村覚之助については、これまでも何度かシンポジウム等で取り上げてきました。「覚之助を日本サッカー殿堂に」ということを、我々は強く願っています。今日は覚之助のお兄さんのお孫さん、中村統太郎さんが、和歌山県那智勝浦町から遠路はるばるお越しくださいました。

覚之助が著した日本で最初のサッカー専門書が『Association Foot-Ball』です。それをもとに練習を開始し、試合を行います。当時サッカーをやっていたの

日本へのフットボールの伝来

- ◆外国人居留地に“クラブ”が生まれる
1868(明治元)年 YC&AC(横浜外人クラブ)
1870(明治3)年 KR&AC(神戸外人クラブ)
- ◆軍人や教師によって近代スポーツが紹介
1872(明治5)年 野球伝来
1873(明治6)年 サッカー伝来
- ◆教育制度が整えられ、「体操」が導入される
「体操伝習所」(1878～1885) 「遊戯」紹介
1886 東京高師体育専修科に改組
1893 東京高師に嘉納治五郎校長着任!

覚之助が著した、日本で最初のサッカー専門書(1903)



日本で最初のサッカー試合に臨んだメンバー



写真提供：中村統太郎

は外人さんだけですから、東京高師は横浜の外人クラブ、YC&ACに挑戦します。1904年2月6日で、日本人最初のサッカーの対外試合です。今年度で120年になります。

卒業生は全国各地にサッカーの種をまいていきます。内野台嶺はあとでまた出てきます。「赴任地にゴールポストを」を合言葉に全国にサッカーを広げていったのが東京高師です。

1917年の極東大会に初めて日本代表が出場しますが、メンバーは東京高師でした。当時日本人でサッカーをやっていたのは東京高師ぐらいですから、そのチームが日本代表として出場します。しかし中国に0-5、フィリピンに2-15と大敗します。これではいかんということで、各地の新聞社が中心になって首都圏、東海地区、関西で大会が開かれます。「日本フットボール大会」は関西の大会でしたが、のちに首都圏に移り、いまの高校選手権につながります。この話もあとで出てきます。

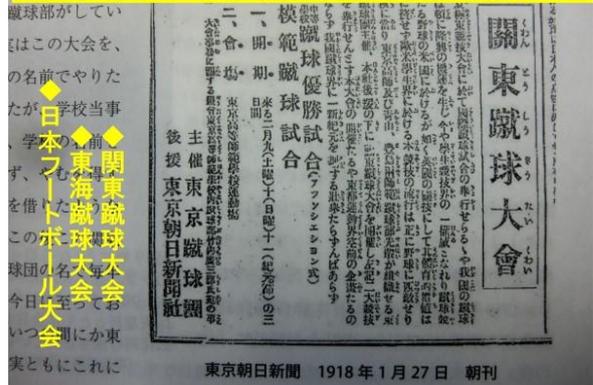
東京高師の卒業後は全国各地へ！

明37(1904)	中村 覚之助	→ 清国山東省濟南府師範学堂
明39(1906)	堀 桑吉	→ 愛知第一師範
明41(1908)	細木 志郎	→ 埼玉師範
明41(1908)	牧野 信寿	→ 広島師範
明41(1908)	内野 台嶺	→ 豊島師範 → 東京高師
明42(1909)	落合 秀保	→ 滋賀師範
明42(1909)	玉井 幸助	→ 御影師範
明44(1911)	松本 寛次	→ 広島一中
大 3(1914)	高橋 英治	→ 刈谷中
大 9(1920)	北村 春吉	→ 静岡師範
大10(1921)	和田 邦五郎	→ 東京高師附属中
大13(1924)	後藤 基胤	→ 湘南中

「赴任地にゴールポスト！」を合言葉に、東京高師卒業生は全国各地にサッカーを広げた

「いだけん」金栗四三の同期生

東京・名古屋・大阪で蹴球大会(1918)



茗友サッカークラブ編、『あのひと、あのとき—エピソードで綴る筑波大学蹴球部の120年』、2016

FA杯と大日本蹴球協会の設立



FAから銀杯寄贈
1919(大正8)年3月

大日本体育協会が受領

嘉納治五郎の命を受け、
内野台嶺部長が尽力
1921(大正10)年9月10日
大日本蹴球協会設立



大正10年、内野は37歳

内野台嶺

第9回極東選手権大会(1930年) 日本代表 アジア初制覇！



初めて予選を行わず、優秀選手を全国から選考した

監督 鈴木重義
主将 竹腰重丸

5/25 07-2フィリピン
5/29 Δ3-3中国(両国優勝)

その翌年(1931)、
日本サッカー協会の
シンボルマークが決まる

日本サッカーミュージアム所蔵

当時は日英同盟の時代です。このような状況を見た英国から、日本のチャンピオンに渡してほしいと銀杯が届きます。大日本体育協会の嘉納のもとに届いた銀杯をきっかけに、日本一を決める大会の創設と、その大会を運営する組織づくりが、東京高師蹴球部長だった内野台嶺を中心に進みます。そしてできたのが大日本蹴球協会です。JFAも2021年に100周年を迎えました。

少しずつ日本サッカーのレベルも上がり、1930年の極東選手権でようやく優勝。その翌年に決まったJFAシンボルマークがいまにつながる三本足のカラスのマークですね。

成田先生が生まれたのはこのマークが決まった2年後です。このような時代背景です。

「日本サッカーの宗家」東京教育大学の学生だったころの話映像を見ていきたいと思います。

紹介映像②

追手前高校を卒業した山中は、東京教育大学、現在の筑波大学に入りました。当然サッカー部からの誘いを受け入部したものの、本格的な練習をしたことがなかった山中にとっては試練の連続でした。そこで、技術の上手い選手と夜間練習にも励みました。ただひたすら努力する郷愁記の精神です。

その成果もあって、山中が中心選手となった3年の時、チームは28年ぶりに関東リーグで優勝。さらに4年生の時には日本代表候補として合宿にも参加。大学4年のリーグ戦では明治大学との試合で5得点の大活躍。

しかし山中は、実践活動よりも体育学の研究の方へ心が傾いていました。

■サッカー部での4年間

中塚：スライドで補足させていただきます。活字部分は全て、成田先生の著書『サッカーと郷愁と』からの引用です。

「同時入学のサッカー部員は、(中略)有名高校出身の選手ばかりで、私のように全国大会未経験の選手などいませんでした」ということで、しばらく入部をためらっておられたようです。しかし「入学後1か月も過ぎたころ、学部の事務室前で突然1人の上級生に呼び止められ、サッカー部の入部を勧められました」。本格的なサッカー部生活が始まりましたが、「不安いっぱいの入部でした」と記されています。『サッカーと郷愁と』には、「猛然と練習に取り組みました。チームの練習が終わったあとはグラウンドに残って、ひとりで暗くなっても練習しました。寮に帰っても練習しました」とあります。ナイター設備はもちろんありません。暗くなっても練習したということです。

そして2年生になった時、一学年下に福原黎三さんが入って来られます。広島出身の名選手ですが、原爆症で若くして亡くなりました。「私の部屋に彼に入ってもらい、サッカーを習うことにしました。月が出ると、私は彼を学部のグラウンドに引っ張り出し、さまざまな技術を習いました」と書かれています。幡ヶ谷のでできごとです。

関東1部リーグでの28年ぶりの優勝は大学3年生の時です。この頃は山中さんです。福原さんは2年生。福原さんの同級生で、のちに全国高体連

福原黎三との出会い

2年生になった時、「ブウ」こと福原黎三君(原爆症で早世)という名選手が広島から入学しました。彼は広島時代にすでに国際試合の経験がありました。寮は1室6畳3名でしたので、私の部屋に彼に入ってもらい、サッカーを習うことにしました。

月が出ると、私は彼を学部のグラウンドに引っ張り出し、さまざまな技術を習いました。

23



サッカー専門部長をされた鈴木勇作さん、順天堂大学で永らく指導された小宮喜久さんもおられます。日本サッカー殿堂で名前が出てきた小澤通宏さんは成田先生の同期です。1学年上のゴールキーパー、村岡博人さんは日本代表として1954年ワールドカップ・スイス大会予選の韓国戦でゴールを守った方です。東京教育大学附属高校の卒業生です。卒業後も皆さん各分野で大活躍されています。

小澤さんのサッカー殿堂入りを祝う会が、2014年10月に都内で開かれました。成田先生は左ウィング、小澤さんは右サイドバックということで、練習ではいつもガチガチやりあっていた話がこのとき出ていました。

集合写真で小澤さんの右隣におられる方は永嶋正敏さん。東京教育大学1期生の主将で、入部をためらっていた山中青年に「サッカー部に入れよ！」と言った先輩がこの方です。

■日本代表候補合宿とドイツ体育史研究

1954（昭和29）年7月、山中青年は日本代表候補選手に選ばれました。大学4年生、21歳のことです。同じころ選出されたのが長沼健さんや岡部俊一郎さんです。ただ、「皮肉なことですが、私のサッカーにかけた青春を方向転換させる契機となった」とのことです。

体育史の研究室にドイツ語のシリーズ本があって「何気なく一番分厚い本を手にとると、『グーツムーツ 青少年の体育』とありました。私はこの本を中心にして卒業論文を書こうと決めました。私の近代ドイツ体育史研究という生涯の専門領域が決まったのはこの時でした」と、著書に書かれています。

『グーツムーツ 青少年の体育』

ある日研究室へ行って書棚を眺めると、その中にドイツ語のシリーズ本『ドイツ体育史料集』が目飛び込んできました。何気なく一番分厚い本を手にとると、『グーツムーツ 青少年の体育』とありました。私はこの本を中心にして卒業論文を書こうと決めました。

私の近代ドイツ体育史研究という生涯の専門領域が決まったのはこの時でした

市民体育理論の成立と展開

近代体育の父 グーツムーツ



18世紀末のドイツで「身体教育」が行われていた



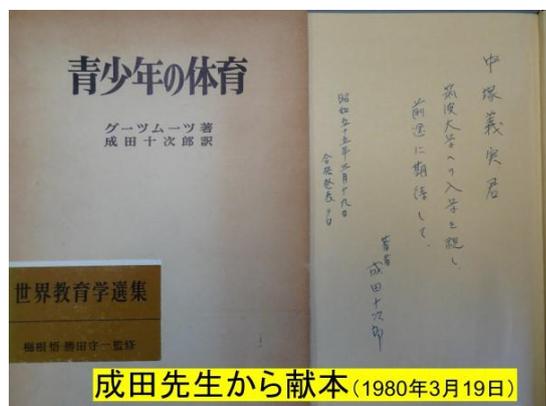
「青少年の体育」(1793年)にみる教材一覧表 (126)

跳	程	輪	回	し
走		ダ	ン	ス
投		歩		行
格	闘	兵	式	運
登	はん	水		浴
平均運動		水		泳
持ちあげ		遊	戯	訓練
運	搬	眠	ら	ない
背筋運動		断	食	の
引き		朗	読	
なわとび		感	覚	の
雑		遊		戯
遊び		そ	の	他

19世紀にヤーンが提唱した「ツルネン（体操）」は、身体運動を通しての新しいドイツ人づくり、集団づくりを目指した運動教育であった

成田十次郎編『スポーツと教育の歴史』不昧堂、1988

成田十次郎編『スポーツと教育の歴史』、不昧堂出版



グーツムーツは、体育の勉強をされている方なら最初に出会う名前かと思えます。「近代体育の父」と呼ばれる方です。ただ、グーツムーツの時代に「近代スポーツ」が成立しているわけではないので、体育の教材は、走ったり、格闘したり、文字通り発達刺激としての運動です。眠らない訓練や断食の訓練、朗読が体育の教材として記されているのも興味深いところです。

ちなみに成田先生のことを幼い頃から聞きながら育った私は、筑波大学入学時に成田先生から2冊の本をいた

できました。そのうちの1冊が『グーツムーツ 青少年の体育』です。

真田さんからグーツムーツについて補足説明をいただけますか。

真田：グーツムーツは1793年「Gymnastik für die Jugend」という本を著したんですけど、これは近代における体育の最初の本と紹介されています。近代市民社会が作られていく中で、どういう人材を作っていくのか。そのことを背景として考えられた体育の内容だと、成田先生が講義等で言われていました。

グーツムーツの本はすぐに各国に伝播しまして、翻訳されていきました。日本では1980年に成田先生が翻訳をして、ヨーロッパが近代に入って最初に著わされた体育の本が、日本で手にとって読むことができるようになりました。

先ほど中塚先生が紹介されたように、今は含まれていない体育の教材も入ってまして、例えば、「感覚の訓練」は確かに、言われてみれば身体の大事な機能です。この感覚を磨くことも体育として大事だというような発想でした。私もこれを読んで、非常に新鮮な思いを持ったことを思い出しました。

中塚：ありがとうございます。このころの合格発表は3月19日だったんですね。遅いんですね。

日本代表候補になった山中青年は、もう一方で体育史研究の分野に目覚めていきます。「私はいろいろな障害に直面しました。端的に言うとかサッカー選手か大学人か」という問題です。「福原黎三君と毎日毎日夜を徹して議論しました。その結果、〈6分4分〉という両立論を立てました」「結果を問わないで努力すべきである」のフレーズはいろんなところで出てきます。

大学院時代、ヨーロッパ留学のあたりを映像で見えています。クラマーさんも出てきます。

6分4分の両立論

論文作成とサッカー練習のはざまで、私はいろいろな障害に直面しました。端的に言うと「**サッカー選手か大学人か**」という問題です。(中略)学問とスポーツについて、スポーツと人生について、私は福原黎三君と毎日毎日夜を徹して議論しました。その結果、「6分4分」という両立論を立てました。(中略)学問に重点を置きつつ、両方をどれだけ高めることができるか「**結果を問わないで、努力すべきである**」と。『郷愁記』の精神です。

30

3. 成田十次郎先生のあゆみ③ 東京大学大学院 (23～27歳) ヨーロッパ留学 (27～28歳)

紹介映像③

東京大学大学院に進んだ成田は、教育学と体育史の研究に取り組みました。そして中学生の時から夢だったドイツ留学を真剣に考え始めていました。

大学院在学中に下宿していたのが成田家でした。戦後、東京都教育委員長をしていた成田千里は亡くなっていましたが、文化女子大学学長をしていた妻・順から、養子に来てほしいと言われ、1959年に成田姓になりました。

成田十次郎となった年の12月、大学時代から文通していた岡瑛智子さんと結婚。瑛智子さんは追手前高校の後輩で、十次郎の姉、良子の教え子でもありました。

この結婚から4か月後、妻・瑛智子を残してドイツへ旅立ちます。念願のドイツ留学に成田は高揚していました。西ドイツのケルン・スポーツ大学でドイツ近代体育史を学ぶのが目的で、成田は自炊しながら留学生生活を

送りました。ローマ・オリンピックが開かれたこの年、成田はヨーロッパ各地の調査旅行にも出かけ、オーストリアのウィーン大学でも学びました。

成田のドイツ留学には、もう一つの使命がありました。それは、有能なサッカーコーチを探すこと。東京オリンピックを控えた日本サッカー協会は、サッカー先進国、ドイツからコーチを招く予定でした。成田のドイツ留学を知った、当時の協会役員が、条件に見合う人物を探すよう依頼したのです。

西ドイツサッカー協会から紹介されたのが、デットマル・クラマーでした。クラマーのサッカー理論と情熱を、成田は一目で気に入り、日本サッカー協会に推薦しました。

成田氏「目がらんらんと輝いてんのよね。いま思えばね、背が低くてね、頭が禿げていて…、そのときはもう、その目にね、惹きつけられましたよ。態度に。これがドイツ人だという。それが最初の印象。

このクラマーが、のちに日本サッカーの父と呼ばれるほど、大きな影響を与えることになります。

■大学院での生活とドイツ留学

中塚：クラマーのところまでできましたが、その前に大学院時代の補足をしておきます。

ドイツ留学について成田先生から直接お聞きしたエピソードです。ベルリン・オリンピックの事務局長でケルン・スポーツ大学初代学長のカール・ディームが来日されました。各地で講演されたようですが、お茶の水女子大での講演に、東大大学院生の山中青年も参加しました。そして「自分はドイツのスポーツ史を勉強したい。ドイツ留学したいのだが受け入れてもらえないか」と、カール・ディームに直談判されたそうです。すごい行動力だと、その話を聞いて思いました。

大学院生ですから、ある程度生活費も稼がないといけません。いくつかの学校で非常勤講師をされたようです。私が筑波大学附属高校への着任報告をしたときに、成田先生が附属中学で非常勤講師をされていたことをお聞きしました。『サッカーと郷愁と』にも記されています。ちなみに教育実習も附属中だったそうです。また、自由学園にも講師として出向き、サッカー部のコーチもされていました。今日も自由学園 OB が何名か来られています。

そしてクラマーさんの話です。

■D.クラマーと日本サッカーの改革

中塚：スライドは、高知新聞の連載『サッカーと郷愁と』の第1回目です。連載はクラマーの話から始まりました。

1960年ローマ・オリンピック出場を逃した日本サッカー界には、1964年の東京大会へ向けて抜本的な改革が求められていました。日本中が注目する開催国の大会で、サッカーもしっかりと成果を出さないといけません。1936年のベルリン大会で、優勝候補スウェーデンを破るという「ベルリンの奇跡」を成し遂げましたが、戦争でずたずたになり、その後は低迷しています。このままではいけないということで海外からのコーチ招聘が検討され、成田先生ということになるわけです。



動画の中でも話されていました。5月のある日、寄宿舎の部屋のドアがノックされ開けると、背が低く額が禿げ上がった小柄なドイツ人が直立不動で立っており、「ドイツサッカー協会からの推薦で参上したデットマール・クラマーであります」と自己紹介をします。これが、日本人がクラマーに直接会った最初ということでした。

最終的には JFA の野津会長が現地に赴き決断するわけですが、その時の決め手になったエピソードも有名です。「目、それ自体は見ることはできない、耳、それ自体は聞くことはできない。ものを見るのも、音を聞くのも、精神である」とドイツ語で書かれた額を見て、「これだ、これなんだ」という野津会長の感嘆の声を、今でも忘れることはできません、と成田先生が書かれています。

<p style="text-align: center;">クラマーとの出会い 「目がらんらんと輝いているのが強烈な印象でした」</p> <p>5月のある日、寄宿舎の私の部屋のドアがノックされ開けると、背が低く額が禿げ上がった小柄なドイツ人が直立不動で立っており、「ドイツサッカー協会からの推薦で参上したデットマール・クラマーであります」と自己紹介をしました。目がらんらんと輝いているのが強烈な印象でした。</p> <p style="text-align: right;">35</p>	<p style="text-align: center;">クラマー招聘の決断 「ものを見るのも、音を聞くのも、精神である」</p> <p>野津会長が8月14日にドイツに到着し、スポーツシューズでクラマーさんに会った日、部屋の壁に掛けてあった「目、それ自体は見ることはできない、耳、それ自体は聞くことはできない。ものを見るのも、音を聞くのも、精神である」とドイツ語で書いた額を見て、「これだ、これなんだ」と言う会長の感嘆の声を、今でも忘れることができません。</p> <p style="text-align: right;">36</p>
---	---

デットマール・クラマーについては繰り返すまでもないでしょう。ただ、8月7日に筑波大の現役蹴球部員に話をしたとき、いまの大学生はクラマーのこともほとんど知らないことがわかりました。伝えていかないといけませんね。「コーチ術」しかなかった日本のサッカーに「コーチ学」をもたらした方であり、代表チームを強化された。それだけでなく、「4つの提言」と整理されていますが、代表チームの継続的な強化、トップレベルの全国リーグ、指導者養成、芝生のグラウンドの重要性を提言として残され、それがいまにつながっています。当時、芝生は観賞用でしかありません。私が高校生の頃もそうでした。こういったことを1964年にクラマーさんが言い残し、1965年に日本サッカーリーグが始まり、1993年のJリーグにつながっていくのです。

クラマーはサッカーの指導面だけでなく、いろんな言葉を残してくれました。東京オリンピックでアルゼンチンに3対2で勝利した後、「試合に勝った者には友達が集まってくる。新しい友達もできる。本当に友人が必要なのは敗れたときであり敗れた方である。私は敗れた者を訪れよう」と語り、アルゼンチンのロッカールームに行ったという話を我々も聞いています。

4年後の1968年、長沼監督、岡野コーチのもとでメキシコ五輪銅メダル。こういう時代につながるわけです。

成田十次郎



デットマール・クラマー

<クラマーの功績>
代表コーチ／全国巡回指導
指導者養成
「コーチ“術”でなく、
コーチ“学”をもたらした」
・1964東京五輪 ベスト8
・1968メキシコ五輪 銅メダル

<クラマーの「4つの提言」>
①代表チーム強化のために
毎年ヨーロッパに遠征する
②トップレベルの
全国リーグを作る
③指導者を養成する
④芝生のグラウンドを作る

JFA 発行『日本サッカー協会百年史』、2023

だいぶ後になりますが、「日本におけるドイツ年」の2005年、翌年はドイツワールドカップの年でした。クラマーが来日するという話を聞き、サロン2002で「クラマーさんありがとう！」というシンポジウムを開きました。クラマーさんはこの時80歳だったと思います。4つの提言がどうなったのかを報告させていただき、クラマーさんに感謝の言葉を述べる場でした。



登壇者はみな当時のサロン2002会員です。一番左は両角晶仁さん。サッカーくじ立ち上げの時の文部科学省の担当官で、芝生のグラウンドづくりをはじめスポーツ環境の整備の大切さを語っておられました。中央は日本フットボール学会初代会長の大橋二郎さん。ゲーム分析データを用いて代表チームの強化やスポーツ科学の現場への導入について話をされました。私はユースリーグの話を用意しつつ進行役を務めました。数日前にぎっくり腰を患い、杖をつきながらの登壇でした。初めてお会いしたクラマーさんに温かい言葉をたくさん投げかけてもらったのを覚えています。

80歳のクラマーさんに座席を用意していましたが、話し始めると立ち上がり、猛烈な勢いで話をされました。迫力満点でした。

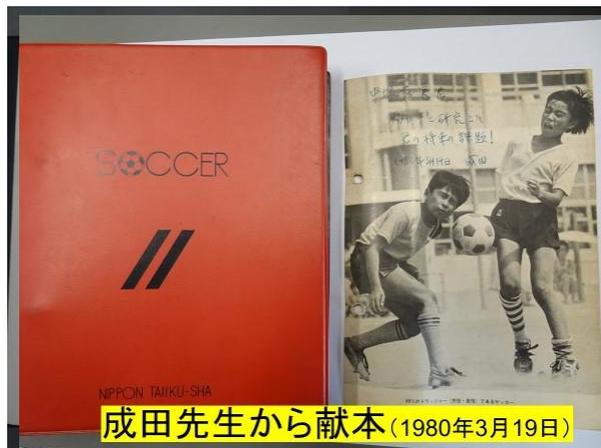
さて、成田先生はドイツ留学中から、野津会長宛の手紙の中で「日本蹴球協会改革案」を示されています。日本のサッカー指導者を一新すべき、指導者養成課程の充実を、指導者教本を作ること、などです。20代の若者の提言です。これらはいま、すべて実現されています。私が筑波大学入学に際して成田先生からいただいたもう一冊が、指導教本でした。

ということでクラマーさんのくんだりでしたが、クラマーさんと成田先生のつながりの中で大変貴重なものがいま竹下さんのところにあるとお聞きしましたが。

日本蹴球協会改革案(成田→野津会長)

- 日本の**サッカー指導者を一新**すべき！
クラマーさんを中心に長沼健さん、岡野俊一郎さん、平木隆三さんのような若手に委ねる
- 指導者養成課程の充実**を！
サッカー指導者は、指導方法論を幅広く身につけた「教育者」でなければならない
- サッカーを広く研究・分析、体系化して協会の「**サッカー指導者教本**」に盛り込む
指導者個人の経験が重視されすぎている。

42



竹下：5月の「偲ぶ会」の打ち合わせで、目白にあります成田家に伺った際に、奥様からこんなものがありますよと見せていただいたものです。アディダスのミニシューズで、なんとこの先にデットマーレ・クラマーさんのサインが入っています。このシューズのことを川淵三郎さんに話したところ、それはぜひサッカーミュージアムに入れてくれと言われたんですが、この6月にJFAが本郷から水道橋に移り、ミュージアムがまだ立ち上がっていませんので、もう暫く成田家に置かれるかと思います。

これはぜひ皆さんに見ていただきたいと思います。いつサインされたものかは定かではありませんが、かなり古いものです。皆さんに回しますので、こういうチャンスはめったにありませんからぜひ手に取ってご覧ください。

中塚：貴重なものを成田家から持ってきていただきました。ありがとうございます。

続けます。成田先生が東京教育大学に奉職されてからのところですよ。ではまず映像で続きをご覧ください。

4. 成田十次郎先生のあゆみ④ 東京教育大学に奉職（28～44歳） 成田十次郎先生のあゆみ⑤ 筑波大学時代（44～63歳）

紹介映像④⑤

留学から戻った成田は、母校、東京教育大学で教壇に立ちながら、体育史の研究にいそしみます。1967年には国際体育史委員会の設立にも参加し、海外にも多くの友人を持ちました。

1968年、東京教育大学サッカー部の監督に就任。ドイツ留学の経験を活かし、成田は、民主的なクラブ運営で理論的なサッカーを目指しました。その結果、就任一年目で、関東大学リーグで優勝。翌年は最終戦の早稲田との試合で終了間際に逆転勝利し、リーグ連覇を果たしました。

大学の監督は2年で退いた^注ものの、成田とサッカー界の関係はさらに続きます。1969年から72年まで、将来のプロ化を見据えた読売クラブの監督も務めます。これがJリーグ発足へと繋がっていきます。

さらに、関西で行われていた全国高校サッカーを首都圏開催に移行したのも、成田の提案によるものでした。

成田瑛智子：子どもたちを連れて、山に登るとかスキーをするとか、そういうふうにもいつもリーダーとして、非常に頼もしい存在でしたね。

1977年、東京教育大学が筑波大学に移行し、翌年教授となった成田は、国内に、国際水準の体育・スポーツ科学の研究・教育体制を創設するために精力的に活動します。海外との交流も増え、成田家には外国から多くの友人が訪れました。

1996年、筑波大学を定年退官した成田は、ふるさと、高知に帰ります。

注)映像のナレーションでは「2年」と述べているが、実際は1968～1970年度の3年間監督を務めた。

中塚：筑波大学の定年退官までのエピソードは山ほどありますので、補足していきたいと思います。

ドイツ留学から戻ってこられたときに、サッカー協会に入るか、文部省に入るか、大学の道を歩むかと、いろんなオファーがあつてすごく悩まれたようですが、4月1日付で東京教育大学の非常勤講師となります。ノーベル物理学賞の朝永振一郎学長から辞令をいただき、体育史研究室に所属し、近代外国体育史の講義を持つようになりました。一方で文部省との関わりもあり、全国へスポーツを広げていく事業にも携わりました。

研究者としては「近代ドイツ体育の成立過程に関する研究—グーツムーツ、ヤーン、シュピースを中心として」で、博士号を取得。学位を取得されたあとに、東京教育大学サッカー部の監督に就任されます。

■東京教育大学サッカー部監督

関東リーグ1部で1968、1969年と連続優勝。結果を残すだけでなく、民主的なクラブ運営が先駆的で、いまにつながるものだと思います。「私たちが目指したクラブの基本は、①将来の優れた指導者養成、②民主的で自主的なサッカークラブ、③サッカーが好きである者は誰も排除しないということでした。私たちが理想とするチームは、勝つことではなく、選手が試合で自分の力を120%発揮できるチームであり、そのためには選手は日ごろから、学年やうまいへたに関係なく、民主的で自主的な雰囲気クラブで生活し、練習していかなければならないと考えていました」と書かれています。

もう少し進めてから柴田さんのコメントをいただきたいと思います。

この頃、学生運動が頂点に達していました。12月に始まる大学日本一を決める選手権大会を前にして、東京教育大学は全学ストライキ。「私は人間教育に対するクラブ活動の大切さを学生に説いていましたが、学生の本分は授業であり、授業をしないのにクラブの練習をするというのは本末転倒であると部員に告げ、合同練習は中止と伝えていました」。しかし複雑な気持ちであったとのこと。

「毎日グラウンドを眺めて心配な顔をしていたからでしょう。選手たちは私を慰めてくれました。＜先生、心配しなくても大丈夫ですよ、きっと優勝しますよ＞とあって、1か月ほど、毎日毎日夕暮れのグラウンドを、もくもくと走っていました。私はこのときの光景を思い出すと、今でも胸が熱くなります。監督冥利とはこのことです」と書かれています。

この時代の主将が柴田さんです。今日は会場に成田監督の前任者でもあった松本光弘先生も会場にいらっしやいますが、柴田さんから、成田監督就任前後のこの時代のことをお話しいただきたいと思います。

柴田：いま紹介がありましたが、私の大学3年間、大変お世話になりました松本先生に拍手をお願いします。（拍手）

松本先生に私は1年生から3年生までお世話になりました。その松本先生が福島大学に異動が決まり、東京教育大学の監督がいなくなるということになりました。なかなか監督になってくださる方がいらっしやなくて、私たちは大変困りました。部長の大石三四郎先生に、形を変えてもいいからどなたか監督をお願いできる方はいらっしやいませんかとお尋ねしたところ、「成田君という人がいるんだけど、受けてくれないだろうなあ」と。私はこのことは本当によく覚えています。

東京教育大学サッカー部監督時代 1968(35歳)～1970(37歳)

私たちが目指したクラブの基本は、

- ①将来のすぐれた指導者養成、
- ②民主的で自主的なサッカークラブ、
- ③サッカーが好きである者は誰も「排除しない」

ということでした。(中略)私たちが理想とするチームは、勝つことではなく、選手が試合で自分の力を120%発揮できるチームであり、そのためには選手は日ごろから、学年やうまいへたに関係なく、民主的で自主的な雰囲気のクラブで生活し、練習していなければならぬと考えていました。

47

東京教育大学サッカー部監督に

関東大学リーグで1968、1969と連続優勝



「サッカーと郷愁と」③ 高知新聞 2009年8月22日

それで、体育史の成田先生の研究室にお伺いしました。先生の話聞いておりました、びっくりすることばかりでした。いままでいろいろ話が出てきておりましたけど、クラマーさんを日本に紹介された方、全日本の代表候補選手になられた方、大学で優勝されている方です。こんな方が校内にいらっしやっただと、私は本当にびっくりしました。

それで、成田先生が監督となるわけですけど、成田先生自体はヨーロッパのクラブの現状をつぶさに見て帰ってこられております。また、それまでの日本のクラブ運営に対してマイナスのイメージしか持っておられませんでした。ここで書かれているものと若干、内容が異なることが出てくるかもしれませんが、私は明確に覚えていることなんです。お許しいただければと思います。

成田先生は監督をするつもりは全くなかったのですが、それは、民主的でない部活動のあり方が理由としてありました。成田先生と話をする中で、私自身が大学生活に疑問に思っていたことがありました。キャプテンだった時、どちらが先に話したのかは定かではございませんが、大学1年生の時は茗荷谷駅の大塚キャンパスで授業を受けていたわけです。午前中に授業が終わり、お昼を食べます。大学のグラウンドは幡ヶ谷にございまして、そこのグラウンドで練習をすることになっています。3、4年生は幡ヶ谷で専門的な勉強をしていますけど、1年生はグラウンド整備のために、お昼を食べてすぐ幡ヶ谷のグラウンドに向かわなければなりません。教員になるための教育大学でありながら、教員になるべき人間が授業をおろそかに過ごしていたんだと理解しております。大学に残って授業を受けられず、お昼で幡ヶ谷に移動しなくてはなりません。私はそのことに疑問を持っており、それを成田先生にぶつけました。そのことが、成田先生が監督を引き受けてくださる決断の、100%とは申し上げませんが、これだったら自分が監督を引き受けてもいいのかなという思いになられたのではないかと推察しています。そんなことから成田先生に監督を引き受けていただきました。

それからの日々はまさに、いままでに私が味わったことのない監督の姿でございました。春休み、大学にはとても長い期間があるんですけど、監督になってすぐ清水で春合宿がありました。これが連日、雨、雨、雨で、雨男という表現をさせていただきました。

雨が降っていても、普通はその中で練習するのが大学のサッカーの当たり前の状況でした。しかし成田先生は毎日討論です。部員全員を集めて、これからのサッカーをどのようにやっていくのかということ、雨が降っている限り討論するというところで、今後の方針を我々に示していただいたのです。それですぐさまついたあだ名が「インテリ原人」です。インテリということですからおわかりいただけると思うのですが、いままでない監督の姿をそのような表現でつけさせていただいたという経緯です。

中でも一番の変革は、4年生は当然のことながら、各学年の代表2名が参加する週1回の会議を必ずやることです。どういうことをしたかという、ドイツの文献を読んで練習内容を選択しました。そのドイツの文献から練習を取り入れていたのですが、ある週においては、話し合いは長い時間に及ぶこともありますし、1時間で終わることもあります。1週間ごとに練習の範囲を話し、その他のことも含め、問題点は週1回のその会議で決めていました。

6月に入ってちょっと暑くなってきたある日の会議です。ゴールキーパーがボールを持った時に、例えば2番のディフェンダーにボールを渡した場合、その時の展開はどうなるか。中盤に行く、前線の

「インテリ原人」と慕われて

ほぼすべての部員達が後年、優れた指導者やスポーツ行政官になるとともに、県協会、大学、高校、実業団、地域サッカーの指導者として活躍しました。さらにひとこと高田豊治君ほか数名が日本サッカー協会の常務理事として、「日本サッカー百年構想」の実現に努力し、私を喜ばせてくれました。彼らから「インテリゲンチャ」(知識人層)ではなく、「インテリ原人」という「あだ名」をもらっていたことを思い出すたびに、今でも笑いが止まりません。⁵²

誰に行く、どこに行く。話し合いは2〜3時間ぐらいかかったと思うんですが、一つのボールが誰に、どのポジションに渡った、そこからどういう展開で、中盤から前線へ、もしくはバックパス…。そういうミーティングを本当に多く行っていました。そういったことは当時の大学サッカーにおいては本当に珍しいことで、我々が目指しているフォーメーション的なものが徐々にできあがっていきました。時にはフォワードだけの練習。時にはディフェンスだけの練習。ある時はそれを合体した練習。このようなことから、4-3-3という形ができあがりました。

皆さん方は承知されているかわかりませんが、日本で初めて4-3-3システムを取り入れたのは東洋工業と言われていますが、実質的には東京教育大学が初めて4-3-3システムを取り入れていました。このことはご承知いただければと思います。

フォーメーションを確立するために多くの時間を割いていたわけですが、練習自体、ドイツの文献を参考にしていました。なぜドイツの文献かと言いますと、成田先生からしますと、これまでの日本の一つひとつの練習が実に無駄であるというのです。例えばヘディングの練習。これは小中高大、どこでもやります。例えば、私は長いこと高校の教員をやっておりましたが、一人がボールを投げてもう片方がヘディングをする。それでボールがちょっと頭を越すようだとして手で取るか、頭を越えて飛び越えたらそれを取りに行き投げる姿勢に入るというような方法でしかなかったんです。しかしドイツの文献に書かれている方法は、4人一組になって一人がキッカー。二人がそのボールをヘディングでの競り合い。残りの一人にヘディングで競り勝ったものがパス。パスを受けたものとヘディングで勝ったものが攻撃権を得、負けたものがディフェンダーとなり、2対1を展開へ。継続して無駄のない練習になります。キッカーが二人の頭を越えるボールを蹴ったら、その二人は走ってボールを取りに行く。どちらが取るかということも大事な練習になるということです。サッカーの専門的な話で大変恐縮なのですが、おわかりいただければありがたいです。そういう形で、練習自体も非常に合理的で無駄のない練習をしていたということです。

夏合宿は栃木県の今市というところで行いました。私は多くの先輩にハガキで合宿の案内を出しました。こういうことをやっているんだと、褒めてもらおうと思って出したんですが、「お前らいったい何をやってるんだ」「なんという練習をやっているんだ」ということで、OBの方は皆、怒って帰られました。これも私の気持ちの中にもものすごく残っていることでございます。

この夏の高校野球で神奈川の慶應義塾が優勝しましてエンジョイという言葉で表されていましたが、その頃の封建的な部活動の中、まさに、民主的・自主的かつエンジョイの活動をしていました。

写真にも載っていましたが、成田先生は常にああいとお顔で、怒られたことがございません。我々は決して妥協するようなことはなかったと自負しておりますが、常に考える、常に自分たちでやっていく。それが成田先生のご指導だったということです。

このあたりでいったん締めさせていただきます。よろしいでしょうか。

中塚：ありがとうございます。お話しいただいた民主的・自主的なサッカークラブのすがたについては私自身、間接的な形ではありますが、高校時代に感じるがありました。大阪府立三島高校の、1970年代後半のサッカー部です。封建的な部活動のすがたが当時から主流でしたが、三島高校サッカー部は民主的部活動だったんです。キャプテンが練習計画を立て、試合に出る出ないも部員で相談して決めていきます。何でそうだったのかを顧問の先生から聞いたことがあります。すると東京教育大学サッカー部の成田監督時代の取り組みを新聞か雑誌で読み、三島高校も民主的なクラブ運営をするようにしたのだということです。卒業生が全国各地に赴任する教育大だからこそかもしれません。

が、当時の取り組みは全国的に大きな影響力があったのではないかと感じております。いかがでしょうか。

柴田：ちょっと私、途中で話を忘れたのではなかろうかと思うのですが、補足させてください。1年生や2年生は授業を受けなさいということは、1年生が、準備のためにグラウンドに来なくて良いですよということです。幡ヶ谷には3、4年生がいますので、3、4年生がボールの空気入れ、グラウンド整備をするという提案をさせてもらったということです。会場にはサッカーを経験された方が大勢いらっしゃると思いますが、当時のボールの空気入れは、いまのように穴があってそこに空気を押し込めばよいということではなく、チューブがございまして、毎日毎日チューブをほどこいて空気を抜いて、ニードルというものがあって皮を締めるんですけど、そういった作業が一個一個あってえらい時間がかかります。そういったことを幡ヶ谷にいる3、4年生がするという提案をさせていただきました。ここを外していたような気がしましたので、そういう意味での民主的な活動をしていこうということで、成田先生に提案させていただいたということです。失礼いたしました。

中塚：ありがとうございます。先ほども少し見ていただきましたが、大学サッカー日本一になります。そしてそのころのメンバーのことを、成田先生が著書の中でこのように書かれています。「いぶし銀の男、柴田宗宏主将は技術も精神も畏敬を感じるほどの人物でした。私たちは彼がいたから、理想の大学サッカーを目指すことができたと言ってもよいでしょう」と。川野淳次さん、高田静夫さん、木之本興三さん、平林正光さん、大栗克元さん、松本好市さん。「みんなの顔が浮かんできます」ということです。インテリ原人のところでは高田豊治さんの名前も出てきます。

これらの方々がJリーグに繋がる、あるいはJリーグ以降も含めて日本のサッカーをいろんな形で支えてこられたということを感じております。

■読売サッカークラブ創設

中塚：そして読売サッカークラブ創設です。ここにも柴田さんが大変深くかかわっておられます。

68年に東京教育大がインカレに優勝します。その直後、野津さん、当時のJFA会長ですが、その方から「読売の正力松太郎さんから、いずれ野球の次にはサッカーのプロ化だ」というお話があり、読売クラブが創設されるという話です。サッカーマガジンの付録ですが、読売クラブ監督が成田先生。柴田さんが選手としていらっしゃいます。柴田さんの1学年下の主将、布浦さんの名前もあります。本日参加の予定だったんですけど、急用で来られなくなりました。大貫さん、田村さん、高田さんの



「いぶし銀の男」柴田宗宏主将は技術も精神も畏敬を感じるほどの人物でした。私たちは彼がいたから「理想の大学サッカー」を目指すことができたと言ってもよいでしょう。大型選手の川野淳次君は攻守に頼もしい選手でした。自由練習でいつも熱心に練習していた高田静夫君は、後に日本人として初めてワールドカップの主審となりました。リーダーシップ抜群の木之本興三君は、Jリーグの創設、発展に力を発揮しました。人間的魅力豊かな「へいちゃん」こと平林正光君は、郷里・長野県では「優勝請負人」と言われ、知らぬ人がいないという高校校長になりました。「クリちゃん」こと大栗克元君、松本好市君...みんなの顔が浮かんできます。

名前もあります。のちに高知大学に赴任された野地さん、柴田さんが4年時の1年生もおられます。木之本さんと同期ですね。こういった方々が読売クラブ創設期のメンバーとして名を連ねておられます。

柴田さん、読売クラブの始まりの頃の話もお願いできますか。



「サッカーと郷愁」③高知新聞 2009年9月12日



月刊サッカーマガジン付録(1972)

柴田：その前にもう一点よろしいでしょうか。関東大学リーグで優勝したころは学生運動が盛んなころで大変な時代だったんです。教育大はいくつかの学科がロックアウトし、授業がなくなり、卒業年度が1年遅れたという学部もありました。体育学部は授業をずっとやっていたのでそういうことはなかったのですが、1960年の日米安保条約と、10年後の改定をめぐる70年安保があり、ちょうど1968年ごろ、我々が大学4年生だった頃が一番激しい学生運動がございました。しかし授業はありましたし、練習も関東大学リーグの時はやっておりました。ただ、関東リーグが終わって優勝しまして、1か月後に大学選手権がありましたけども、その間は練習も一切できませんでした。合同練習は3日間だけです。成田先生から、君たちは学生の身分なのだ。勉強をしないのにサッカーはできないということで、3日間だけ合同練習が許され、あとは1か月、ただただ授業が終わった後に集まっては討論会、討論会、討論会…。夜遅くまで。ということで、夕方に時間を見つけて走っておりました。

先ほど話がありましたが、幡ヶ谷のグラウンド横には文化服装学園の寮がありましてその間に坂がございます。そこに集まって、ただただ時間をかけて走っていた、という思い出は忘れられません。

このころ学生運動が頂点に達していました。12月に始まる大学日本一を決める選手権大会を前にして、**東京教育大学は全学がストライキ状態**に入っていました。私は人間教育に対するクラブ活動の大切さを学生に説いていましたが、**「学生の本分は授業であり、授業をしないのにクラブの練習をするというのは本末転倒である」と部員達に告げ、「合同練習は中止する」と伝えていました。しかし、大学選手権大会を目前にして、「試合対策練習」が出来ないことに、監督としては内心複雑な気持ちでした。**

毎日グラウンドを眺めて、心配そうな顔をしていたからでしょう、選手たちは逆に私を慰めてくれました。「先生、心配しなくても大丈夫ですよ、きっと優勝しますよ」と言って、一か月ほど、毎日毎日夕暮れのグラウンドを、もくもくと走っていました。**私はこの時の光景を思い出すと、今でも胸が熱くなります。監督冥利とはこのことです。**

1か月に3日しか練習してないわけですから、成田先生は、とても勝てるとは思っていらっしやらなかったと思います。私はいまになって、先生の気持ちを代弁できます。ただ私は、1回戦さえ勝てば必ず優勝できますから大丈夫ですということをお話させていただきました。それほどまでにチーム戦術ができあがっていたということで、一試合やって試合勘さえ戻れば大丈夫だと思い、そういう話をさせていただきました。

中塚：つまりこのスライドのこの発言は、当時の柴田さんが成田先生にされたものですね。

柴田：そのとおりです。成田先生に壁があるかというたないですよ。あれこれしゃべっていたのは私が一番多いということで、この言葉も明確に、私が申し上げたことだご理解下さい。

それで大学選手権も優勝しまして、1月ごろだったと思います。日本テレビの笹浪栄光さんという方と、読売新聞社運動部の牛木素吉郎さん、日本テレビ運動部におられた坂田信久さんが、1969年4月からプロを目指す読売クラブを作るのでコーチの派遣をお願いできないかと、成田先生のところに来られたと聞いております。私もすぐ成田先生に呼ばれて、こういう話があるんだけどどうだろうかという依頼がありました。私は教師になるつもりで教育大に行ったんですけど、途中からコーチというものに魅力を感じまして、大学3年生のときに、本格的なプレーヤーとしては大学4年生で終わり、コーチの世界に進んでみたいという気持ちがありました。成田先生と研究室の多和先生と相談しました。コーチの世界に進むにあたって大学に名前を残しておいた方が良いのか、それとも完全に卒業してしまっても良いのかということをご相談しましたら、大学に名前だけでも残しておいた方がよいとのことでした。次の年に大学院を受けるつもりでございましたが、成田先生からそういうお話がありましたので、私にとって渡りに船ということで、4月から読売サッカークラブに入ったということになります。

中塚：柴田さんと読売クラブとの関わりはこのあと何年くらい続いたのでしょうか。

柴田：5年半くらいになります。

中塚：読売サッカークラブのまさにはじまりのところで、成田先生はじめ教育大の方たちがこんなにも関わっていたのかということですね。思い起こすとJリーグ初年度のチャンピオンシップ。前期優勝の鹿島アントラーズと後期優勝のヴェルディが、国立競技場で2試合行いました。

「ジーコつば吐き事件」です。ジーコさんが怒っていたのは、「レフェリーは相手側の出身者ではないか」。高田静夫さんだったんですね。そんなことまで考えてジーコさんはサッカーやっていたんですね。

■高校サッカー首都圏開催

中塚：次のエピソードです。先ほどから出ておりますが、高校サッカーの首都圏開催についてです。長らく関西で開催されていた大会の最後の大会は浦和南が優勝し、田嶋さんがキャプテンでした。中学2年生の



「サッカーと郷愁と」③高知新聞 2009年9月5日

私は長居競技場に毎日観に行きました。翌年から首都圏開催。76年度の大会ですね。この首都圏移転の発端が成田先生宅でのミーティングにあったということです。

「土佐高サッカー部の出身で、高知放送に勤めていた宮村剛君の紹介で、電通の鍋島徳行さん（同校のバスケットボール部出身）が、東京・目白の自宅を訪ねてこられました。用件は、〈野球の甲子園に匹敵するスポーツイベントを立ち上げたい。そのために電通が億単位のお金を用意している〉」というものです。もちろん歴史と伝統ある高校選手権を関西から首都圏に動かすのが、この方々の一存で決まるわけではありません。高体連の現場の先生方が本当に力を尽くされたのですが、その発端にこういうことがあったということです。

竹下さんいかがですか。高知の方がこのように関わっているということ、あるいはメディアのかかわりという部分で。

竹下：『サッカーと郷愁と』に出てくる宮村剛は高知放送の先輩で、私自身も高校サッカーの中継に深くかかわりました。先ほど出てきた坂田さんは東京教育大サッカー部で松本光弘さんの一つ上の学年です。東京ヴェルディの社長もされた方ですが、高校サッカーの首都圏移転にも関わり、このあと箱根駅伝や世界陸上にも携わり、私も大変お世話になりました。

1971年に成田家で話があった6年後の1976年度に首都圏に移転します。実は私も予選に出たんですけど本大会は出られません。あとから成田先生に伺いましたが、甲子園だったら満杯になりますが、関西でやっていた高校サッカー、けど競技場は満杯にならない。どうしても野球人気に押されてサッカーがなかなか満杯にならない。日本サッカー協会としても、東京でやったらもう少し人が入るのではないかとの考えがある。ということで、そこで動いたのが坂田さんであるわけです。そして、高知県出身の3人がそういった基礎のお話をされたうえで、日本サッカー協会、高体連、日本テレビというところが動いて実現したのです。いま高校野球に匹敵する、決勝戦には何万人も入るような大きなイベントに成長しました。そこに高知県出身の方が関わっていたということ、非常に誇らしく感じております。

■東京教育大学から筑波大学へ

中塚：ありがとうございます。

東京教育大学の最後のところ。茗荷谷の駅前に大塚校舎があり、幡ヶ谷に体育学部、そして駒場にも校舎があり、いろんなところに大学の機能が分散されている。これを1か所に統合しようというのが筑波移転の話の発端だと聞いています。そこにいろんな要素がくっついて、最終的に東京教育大学は廃校となり、新構想大学として筑波大学が創立されます。

渦中であって成田先生はご自分の身の振り方について相当悩まれたという

ことが『サッカーと郷愁と』に書かれています。「成田さんは筑波へ行って、自分たちが理想とする新しい大学を作る努力をされるのがよいと思います」のアドバイスを受け筑波行きを決意されます。

「式の後に家へ帰り、書斎にこもりました。涙があふれ、止まりませんでした。私は心のよりどころを失った寂しさ、虚しさに打ちひしがれました」と書かれています。



この過渡期を過ごされた方が、今日も何人か来られています。筑波大学2期生の真田さんもその一人です。真田さんからはのちほど、成田先生の研究面についてご紹介いただきます。

■筑波大学での成田先生と体育・スポーツ界の変容

中塚：筑波大で成田先生が力を入れておられたのは体育・スポーツ史の研究組織づくりであったことが著書に記されています。筑波大学や日本国内はもちろんのこと、朝鮮半島だったり中国や台湾だったり、東アジア全域に及びます。欧米の方々とのつながりも続き、国際大会に参加されるごとに「体育の世界で何かが大きく変わろうとしている」ということを感じられます。これまでの「体育」という言葉に代わって「スポーツ」という言葉が用いられるようになってきたということです。体育からスポーツへの流れは、文部省だけでなく、当時の通産省にも広がりながら、教育の部分だけではない、スポーツの多様な側面、広がりに着目されてきた時代だろうと思います。

おそらくこのような動きが、Jリーグ誕生につながってきたのでしょう。



「サッカーと郷愁と」④1高知新聞 2009年10月17日



「サッカーと郷愁と」④2高知新聞 2009年10月24日

中塚：成田先生のほっとするひと時「いごっそう会」です。筑波大学の高知県人会で、私は大阪出身なのですが、なぜかここに顔を出していました。お酒の飲み方はここで覚えました。

成田先生の筑波大学での教員生活は1996年まで続きました。

真田さん、お待たせいたしました。研究の分野での成田先生をご紹介いただけますでしょうか。

■成田先生と

ドイツ、体育・スポーツ史研究

真田：それでは私の方から、成田先生がドイツの体育史、スポーツ史研究を通してどんなことを提言、提案されたのかというのを簡単に説明したいと思います。

成田先生はドイツ体育・スポーツ史の研究にずっと打ち込まれていました。その成果が、体育・スポーツ史に関する4冊の本であります。第1巻から第4巻まで、近代ドイツの18世紀から20世紀に



「サッカーと郷愁と」③9高知新聞 2009年10月3日

かけてまとめられました。最終的には第5巻、現代体育・スポーツの登場と展開というところまで書き上げたいと思ってらっしゃったそうであります。

5巻は未完ですが、最後には「多様なスポーツ時代の登場と動向」という、現代の問題についても射程に入れて構想されていました。ドイツの資料を相当使って書かれています。冒頭に紹介しましたように、

「Dr.十次郎成田は完璧にドイツ語を理解する」と、ドイツの研究者からも言われておりました。

成田先生がなぜドイツの研究をするのかについて、2つの視点を紹介されたことがあります。「日本人が外国の歴史を研究するということは、比較史の意味を持つ」。これは先生が尊敬される、歴史家の方の話です。日本と外国を比較してみるという視点が大事なのだということです。2つ目は、1960年にドイツに留学した時に、ドイツの学校に運動場がないということに非常に驚いたということなんです。日本では、学校に行けば必ず運動場があり、体育館があり、プールがありますが、ドイツにはそういったものがなかった。ではどこで運動しているのかというと、地域のスポーツクラブであったわけなんです。ですから、日本では学校の運動施設でスポーツが行われてきましたが、ドイツでは地域スポーツクラブ。これがまさに、成田先生がドイツのスポーツ史を研究する上で、常に比較している内容だったと思います。

私はギリシャに1年間いたことがあるんですが、この写真は成田先生が来られて、古代のオリンピックの競技場にお連れした時のものです。競技場に入るや否やスタートラインを見つけまして、古代人と同じように裸足になってみようと言って、「こんなふうに足を掛けたそうですよ」と言ったらそのように足を掛けて試しておられた。現場ですぐに体験してみることを成田先生から教わりました。

先ほどの第5巻の最後、現代の体育スポーツのところですが、ドイツは現代の体育・スポーツの実現に向けた構想を100年前から持っていたことを書こうとされていたようです。日本も明治以来の近代体育・スポーツを現代化しなければいけない。現代に適応した体育・スポーツのあり方を考えなくてはいけないと言われていました。その一例として、例えば大学に教員養成とは違う別科を作り、ス

ドイツ体育・スポーツ史の研究



- 1巻「学校・社会体育の成立過程」
- 2巻「社会・学校体操制度の確立」
- 3巻「ドイツ体育連盟の発展」
- 4巻「近代体育の改革と変容」

- 5巻「現代体育・スポーツの登場と展開」
- 4節 多様なスポーツ時代の登場と動向

成田先生の二つの視点

1. 「日本人が外国の歴史を研究するということは、比較史の意味を持つ」
2. 1960年にドイツに留学して「ドイツの学校には運動場がない」という驚き

日本： 学校での運動施設
ドイツ： 地域スポーツクラブ



オリンピックにて 1989

日本の近代体育・スポーツの現代化

- ・ドイツは現代の体育・スポーツの実現に向けてをワイマール期から「拡大と深化」を着実に進めている
- ・日本も明治以来の近代体育・スポーツを現代化しなければならない
- ・広い知識と技能を習得した各種目のスペシャリストが必要
(スキーを教える場合、スキーの技術だけではなく気象学、地形論や雪崩論も必要)
- ・体育・スポーツの用語の概念や変化を整理する
- ・各国の近代から現代への体育・スポーツの改革に関する国際比較的研究
- 大学に、スペシャリストに関わる研究教育の課程を別科課程として、スポーツ協会などと連携して設置すべき

ポーツ協会などと連携して、スポーツのスペシャリストを育てるべきである。例えば専門的にスキーを教える、水泳を教える。スキーで言えば気象学や地形論、雪崩論などを含めた知識と技術を持ったスペシャリストを養成しなければいけない。それが生涯スポーツの展開に大事であると考えられていたようです。

現代化という中には私は2つの意味があったと思います。一つは、学校体育一辺倒からの脱却ということです。これはドイツとの比較ですね。1980年ごろ、私が学部の学生・大学院生のころ先生がよく言われていたのが、体操が体育へと発展し、それがスポーツへと変わっていった。これがヨーロッパ、とくにドイツの流れだということだったんです。日本は体育、学校体育が中心な

んですけども、これからの多様な生涯スポーツ体制を確立するためには、学校と学校外の体育・スポーツの特性や関連性を明確にすることが大切だということ、2019年の日本体育学会で話をされました。それまでの講義でもずっと言われていたことでもあります。

実際の日本のスポーツ行政の変化を見てみますと、スポーツ庁が2015年にでき、日本体育協会も2018年に日本スポーツ協会に変わり、体育というものがスポーツへとどんどん変わっていきました。日本体育学会もさんざん議論致しましたが、スポーツを入れて日本スポーツ・体育・健康学会という名称で2年前に再スタートしたわけです。そして昨年はスポーツ庁、また文化庁も、部活動の地域移行に踏み出しました。これは、成田先生が言われていた、学校体育一辺倒ではなく、地域のスポーツ、地域が受け皿となってスポーツを展開していく方向になってきたということではないかと思えます。

もう一つ成田先生が80年代半ばごろから言われていたことですが、スポーツ種目を中心とした体系、学問体系が大事になってくるということです。

20世紀のドイツのケルンで、体育の概念はいろいろ議論されてきました。TurnenとかLeibesübungenとかKörperziehungとかいろいろな言葉を使って体育の意味を検討してきましたが、と同時に体育学とは何なのか、どうすれば市民権が得られるのかということドイツではずっと議論されてきました。つまり、スポーツが学問としてどうやったら成り立つのかということです。日本でもそれは大事なことで、やらなくちゃいけないんですが、特に生涯スポーツの時代においては新たな学問体系が求められます。スポーツ知識の体系の中枢にスポーツ種目が置かれるべきで、左右には個別学問領域と課題別領域を位置づける。こうしてサッカーとか水泳という種目を、学問として成立させていくべきだということを言われていました。

学校体育一辺倒からの脱却

- 1980年頃の先生の講義
体操 → 体育 → スポーツ
- 「多様な生涯スポーツ体制を確立するためには、学校と学校外の体育・スポーツの特質や関連性を明確にすることが大切」(2019)
- スポーツ庁 2015-
- 日本体育協会 →
日本スポーツ協会 2018-
- 日本体育学会 →
日本スポーツ・体育・健康学会
2021-
- 部活動の地域への移行

スポーツ種目を中心とした体系

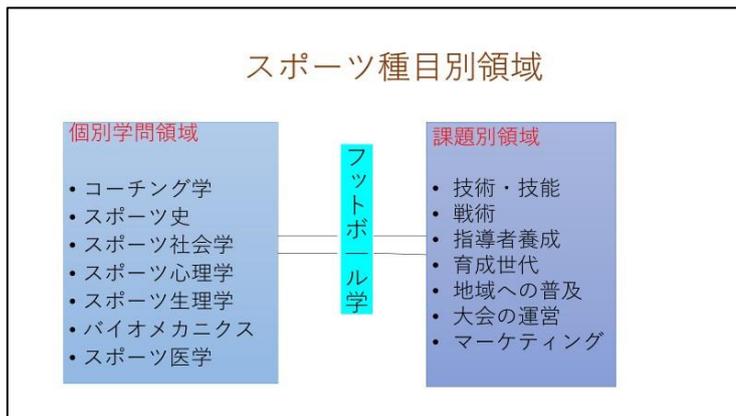
- 20世紀以降、ドイツにおける体育の概念の議論と変遷
Turnen, Leibesübungen,
Körperziehung, Sport,
Bewegung, Körperkultur
- 生涯スポーツの時代において新たな学問体系が必要(1995年)
- スポーツ知識の体系の中枢にスポーツ種目別領域
- 左右に個別学問領域と課題別領域
- 体育概念の明確化の流れで、1970年から本格化する体育の学問性の議論

これまではコーチング学、スポーツ史、社会学とか、心理学、生理学、バイオメカニクス、スポーツ医学などがそれぞれ個別に成立していましたが、それがフットボール、水泳、陸上というところとつながり、たとえばフットボールの歴史といったものを体系化していく。課題別領域では技術や技能が同様になっていく。戦術や指導者養成、育成世代をどうやって育んでいくのか、地域にどうやって普及していくのか、大会の運営やマーケティング。こうした課題をまとめて、フットボール学というものが成立していく。このように、これからの時代は生涯スポーツの観点から、単にスポーツの歴史とか生理学ではなく、より多くの人が興味を持ってくれるような学問体系、それがスポーツの発展にも寄与していくということを、成田先生は何回か提言しておられました。

よく考えてみますと、最近種目別学会が非常に増えてきております。ランニング学会や日本スキー学会は古いんですけど、21世紀に入ってからでは日本フットボール学会が2003年にできています。日本ハンドボール学会、バスケットボール学会、日本野球学会、バレーボール学会など、種目別の学会が成立しております。その内容は、ランニングやフットボール、ハンドボールなどの科学的研究、そしてそのスポーツの普及・発展に寄与するということが挙げられています。また関連機関、スポーツ協会等との連携や、指導現場と研究者間の情報の共有を図っていくことが掲げられ、種目別の学会が今世紀に入ってどんどん誕生しております。これは成田先生が示された方向に一歩進んだのではないかなと思うわけでありませう。

こうしてみますと、日本の体育・スポーツ学への貢献、歴史学への貢献はもちろんあります。国際学会の副会長や理事になって、その情報を日本にいち早く取り込んでいただきましたし、東北アジア、アジアとの連携、そして産業界との連携も進められました。スポーツ産業学会ですね。さらに学校体育のみでなく、地域におけるスポーツの大切さを、ドイツの、スポーツの歴史を通して示し、それを日本のこれからの方向性にも道しるべとして与えてくれたと思います。さらにスポーツ種目の学問体系の提言をされ、示してくれたということも、これからの日本のスポーツ学発展にとって非常に大事な点ではなかったかと思ひます。

こうしてみますと、日本の体育・スポーツ学への貢献、歴史学への貢献はもちろんあります。国際学会の副会長や理事になって、その情報を日本にいち早く取り込んでいただきましたし、東北アジア、アジアとの連携、そして産業界との連携も進められました。スポーツ産業学会ですね。さらに学校体育のみでなく、地域におけるスポーツの大切さを、ドイツの、スポーツの歴史を通して示し、それを日本のこれからの方向性にも道しるべとして与えてくれたと思います。さらにスポーツ種目の学問体系の提言をされ、示してくれたということも、これからの日本のスポーツ学発展にとって非常に大事な点ではなかったかと思ひます。



以上のことが成田先生の歴史、体育・スポーツ学を通しての体育・スポーツへの貢献だと思っております。

中塚：どうもありがとうございました。成田先生のサッカー界における貢献は計り知れないものがありますが、研究者としての成田先生の功績もとてつもなく大きいものであることが、いま改めてわかりいただけたのではないかと思います。ちなみに今日は書籍販売コーナーを設けており、2割引きで不昧堂出版の本を販売しております。先ほど紹介されましたドイツスポーツ史研究の全4巻も購入可能です。『サッカーと郷愁と』もあります。ぜひご購入ください。

スポーツ史研究のネットワークづくりで東アジアの研究会を組織される中で、成田先生はソウル大の先生と繋がりを持っておられました。このことがきっかけとなって筑波大とソウル大のサッカー交流がはじまったということは、今日も現役蹴球部員が来てくれていますが、ぜひ知っておいてもらいたいです。

続けます。終わりの時間も迫ってまいりました。成田先生が筑波大学を定年退官された1996年まで映像をみましたが、その続きを見ていきたいと思っております。高知へ戻られて以降の話です。

5. 成田十次郎先生のあゆみ⑥ ふるさと高知を中心に（64歳～）

紹介映像⑥

1996年、筑波大学を定年退官した成田は、ふるさと高知に帰ります。高知女子大学の学長として迎えられたのです。

成田十次郎：高知女子大は県立大学ですから、大いにですね、県民の幸福と申しますか、県の発展のために有効なプロジェクトを組んでですね…

成田瑛智子：高知は昔から大好きですから、高知に帰れるってことはうれしかったですけれども、学長っていうのはとても責任がある地位ですから、緊張感が強かったんじゃないでしょうかね。

成田は2002年に学長を辞任しましたが、高知県内の教育や、スポーツの様々な協議会や団体で、それまでの経験を生かして活動しました。

1998年には高知県サッカー協会の会長に就任し、再びサッカーと関わります。

2002年の高知国体では、親善試合で高円宮様とサッカーを楽しみました。この時、ゴールキーパーを務めたのが、かつてクラマーから指導を受けた、日本代表のFW、日本サッカー協会の川淵三郎会長でした。

成田瑛智子：友人ですね。中学時代、それからいろんな先輩とか後輩とか、そういう人に恵まれてましたね。だから、そういう中で仕事に打ち込めて、全力発揮できたっていうのは、非常に幸せだったと、見ていて、そう思います。

成田は、いまでもふるさと池川に帰ると、「あい」を取りに来ます。川に入っている時の顔は、目を輝かせて無邪気に遊ぶ少年のようです。

2010年、成田は、それまでの功績が認められ、瑞宝中綬章を受けました。

成田：ひとから勲章をもらうとかね、国から勲章をもらっているのが、若干恥ずかしい。そういう気持ち…

そして、『サッカーと郷愁と』を出版。杉正俊の『郷愁記』に魅せられてから、65年の集大成です。

中塚：映像はここまですになります。少しスライドで補足します。

映像にもあった通り、筑波大学退官後、成田先生は高知女子大の学長として高知に戻られます。高知県サッカー協会の会長になられたのは2002年。FIFA ワールドカップの年ですね。

■トリムカップのはじまり

中塚：竹下さんから冒頭に話がありましたが、成田先生が高知県FAの会長をされている間、「高知で何かできないか」という動きがあり、女子のフットサル大会がはじまりました。全国女子選抜フットサル大会「トリムカップ」です。いまま日本フットサル連盟主催で続いているこの大会は、2006年度から高知で、関西圏の招待大会として始まりました。

これには私の父、中塚頼彦がかなり絡んでいます。大阪の実家で日本トリムの話が出てきて、「成田先生が会長でいらっしゃるのに、高知県FAは何もやらんのか」と怒りながら「ママさんサッカー大会を高知でやる」と、父が言い出しました。高知の女性は「はちきん」と表現される活発な県民性で有名です。そこからきた発想でしょうが、「ママさんという言葉はあかん。レディースや」。そして「屋外のサッカーよりも室内のフットサルの方が女性には向いている」と私が提案。そんな中塚家の飲み話がこんなふうになりました。もちろんこちら側からの視点でしかありません。



トリムカップの写真はいずれも、撮影・提供：中塚義実

2007、2008年とトリムカップは西日本の招待大会として行われました。そして2008年3月の大会中に、サロン2002の月例会として「成田十次郎先生にきく」の機会を設けました。竹下さんもご参加くださいました。

成田先生がこのとき言うておられましたが、クramer招聘の話をご公の場で話されたのはこの時が初めてだそうです。NPOサロン2002のホームページに報告書がありますので、是非ともお読みください。日本サッカー殿堂に推薦するにあたり、本日のシンポジウムとこのときの報告書、および成田先生の著書『サッカーと郷愁と』を資料として添えたいと考えております。

成田十次郎先生にきく
—高知・日本・ドイツのサッカーとトリムカップ—
成田十次郎 (高知県サッカー協会会長)

【日 時】2008年3月29日(土) 19:10~21:55
(その後高知市内で懇親会~0:00頃/若手?はもう1軒~2:30頃)

【会 場】南国市立スポーツセンター研修室(高知県南国市)

【テマ】成田十次郎先生にきく—高知・日本・ドイツのサッカーとトリムカップ

【語り手】成田十次郎(財)高知県サッカー協会会長

【参加(会員)】牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会) 浦和俊介(株式会社フォーレックス) 高橋正紀(岐阜経済大学) 中塚義実(筑波大学附属高校/サロン2002理事長) 西村祥央(高知県FA事務局次長) 吉村修(高知県FA副会長)

【参加(未会員)】大塚正洋(南国高知ブランコバレイア) 川原永光(バルドラール浦安) 北村悦子(高知県FA) 窪田英一郎(RKC高知放送) 竹下誠一(RKC高知放送) 武市晃尚(高知県FAフットサル委員長) 谷脇守(高知新聞社) 成田十次郎(高知県FA会長) 野口奈徳実(株式会社) 松本一雄(高知商業高校) 山本英作(高知学園短期大学) 傍土和好(自営業) 村上秀人(高知県FA広報委員長) 村上秀二(明德義塾高校サッカー部コーチ) 森木育悟(韓国日本トリス)

【懇親会からの参加者】福川元多賀(高知県FA専務理事)

2009年3月から、トリムカップは全国女子選抜フットサル大会となりました。日本フットサル連盟会長だった大仁さんも来られました。冠スポンサーの日本トリムからのプレゼンテーション、地元芸能・文化を披露する場なども設けられていました。

竹下さん、高知へ戻られてからの成田先生について、トリムカップのことも含めて補足、エピソードの紹介をお願いします。



竹下：1996年に県立高知女子大学、現在は県立大学になっておりますが、そこの学長になられました。

先ほど教育大サッカー部の運営の話の中で、学生の自主性とか主体性ということをおっしゃいましたけど、成田先生は大学運営に関しても、学校の自治、自主性というのを非常に重んじられた方でした。それが守られないできごとがあり、辞職することになりました。大学の自治が守られなかった、自分としてはそれは全く意図するところではない、納得できないということです。当時の橋本大二郎知事に辞表を出すという格好になりました。不本意だったと思います。

先生は、学校のこともありますが、高知へ帰られますと友人が多いもんですから、私もよく誘われました。カラオケ、ゴルフ、大好きでございました。ただ先生は、先ほどから温厚で怒ったことがないと言われましたけど、実は非常に意思の強い方で、自分の言ったこと、自分の方針は決して曲げない方でした。ゴルフも正直言ってうまいほうではございませんし、正直なところ歌もそんなにお上手ではない。しかし自分の歌い方は曲げない。ゴルフの打ち方も曲げないという方でもございました。

トリムカップの話ですが、先ほどの高校サッカーの首都圏移転と同じように、ここにも高知県が関わっています。日本トリムのロゴの下に座っておられる方が森澤社長です。高知県土佐清水氏出身で、大阪に本社のある、世界的な整水器メーカーです。この方と中塚先生のお父様の頼彦さん。先ほど話がありましたが、本当に元気な方で、私は毎日電話をもらいましたよ。「おい竹下、どうしてる？」って。いつも電話かかってくるんです。「ああまた電話かかってきた」と思って。「やってますんで」「やってるって何が進んでるんだ」「いやあの、やってますから」と言いながら…。

そこで動かされたのが成田先生で、高知県人がこういう大会に持っていくということです。

最初は西日本のレディース大会で始めたんですが、2009年に全国大会に昇格します。その時はまだ高知県サッカー協会主催だったんです。私が日本フットサル連盟にお願いして、3年間高知でやってください、そこから先はどうぞ各地でと。高知で3年やった後に、日本フットサル連盟主催として全国巡回しております。2年前、2021年に10年ぶりに高知県で開催しました。大きな大会を高知から発信するということが大事でした。

女子フットサルの話になりましたけど、私はいま、子どもが減っている中で、女性のスポーツと障がい者のスポーツに力を入れたいと考えています。そういった話を成田先生としましたら、成田先生のほうから今度は、先ほど真田先生がおっしゃったように地域のスポーツとして、「竹下いいか。これからは国家資格として指導者を養成する」。これはやはりドイツの発想だと思いますね。県立大学で教えていましたので、そのための講座を作れとおっしゃいました。「どうするんですか？」というと、例えばいまサッカーだといわゆるD級からS級まで資格がありますが、これは日本でしか通用しない。ヨーロッパでは通用しないんです。ですからそうではなく、国家資格としてスポーツを教える人材を育てる。その拠点を高知へ作るのだということを、コロナになる前の2016年頃、ずっと言われてました。その講座は簡単には作れなかったです。でも、やっぱりそういった熱意で、先生のスポーツ界への最終的な目標がそこにあったのではないかと、いま改めて感じております。

中塚：ありがとうございます。成田先生の周りには、はっぱをかける人だったり、いろいろ細かなところをフォローしてくれる人だったり、さまざまな人が集まって、成田先生からいろいろなことが始まっているということを改めて感じる次第です。

いよいよクロージングに向かっていきます。もう映像はありません。スライドだけです。

■最後にお会いした成田先生

中塚：成田先生は高知から東京へ戻ってこられますが、高知にもちょくちょく出かけておられました。私からすれば目白のご自宅も近いので、もっと足しげく通うべきだったなと改めて思いますが、いくつかの節目でお会いしていました。例えば、筑波大学蹴球部120周年、その時にまとめた『あのひと、あのとき』という本も、本日こちらで3,000円で販売しておりますので、よろしかったらどうぞ。成田先生はここにいらっしやいます。私はこの時、茗友サッカークラブの理事長をやっていたのでこの会を仕切っていましたが、こんなところにおります。



そして最後にお会いした成田先生は2020年1月26日、場所はここ、桐陰会館です。座っている場所は、そのあたりです。成田先生の横には中村統太郎さん。覚之助の子孫で今日も来られています。真田さんも反対側に座っておられます。日比野克彦さんは東京芸術大学の美術学部長、いまは学長です。永田恭介筑波大学学長もいらっしゃいます。私もここにちょこんといます。コロナになる直前ですね。

何があったかという、サッカー×アートというシンポジウムです。三本足のカラス=ヤタガラスを用いたJFAのシンボルマークについていろんな観点で語ろうということです。このマークが決まった時のJFAの重鎮が内野台嶺。何度も出てきますが漢文の先生で蹴球部長、高等師範とともに高等師範附属中でも漢文を教えておられた方です。初代主将の中村覚之助は、八咫鳥伝説の里である那智勝浦、熊野の出身です。実際にデザインしたのは日名子実三というアーティストで、東京美術学校、いまの東京芸術大学美術学部のご出身です。この方もヨーロッパ留学された、彫刻界の第一人者です。

シンポジウムのあとの懇親会冒頭に、成田先生からコメントを頂戴しました。するとカバンの中から小さなライオン像を取り出し、熱く語られました。成田先生の義父、成田千里がヨーロッパから持ち帰ったもので、ブリュッセル郊外のワーテルローの戦いのシンボルとしてのライオン像です。ナポレオンがイギリス軍に敗れるあの有名な戦いの遺跡跡地にある像ですね。このライオンをよくみると、大砲の上に足を乗せています。これがJFAのマークに非常に似ている。製作者の日名子はおそらくこのライオン像をみてJFAのシンボルマークを考えたのではないかということでした。

成田先生がカバンから持ち出されたこのライオン像を、今日は成田先生のお嬢さん、慈子さんが持ってきてくださいました。成田先生の机の上に『郷愁記』とともに、ずっとこの像が置かれていたということです。



実はこの1か月後、珍しく成田先生から電話がかかってきて、この話の続きをされました。それが最後の電話となりました。三本足のカラスの由来は、日名子がおそらくこのワーテルローの丘のライオン像を見て、インスピレーションを感じたに違いない。ライオンは4本足ですがカラスは3本足で、このうちの1本がボールに乗っている。このあたりを解明してくれたまえというようにお話でした。日本ヤタガラス協会の使命でもありますね。

このころから新型コロナのパンデミックです。成田先生にお会いすることはありませんでした。



ライオン像を披露される、成田慈子様。隣は成田瑛智子様

■『郷愁記』の地・アグラへ

中塚：『サッカーと郷愁と』は1年間続いた高知新聞の連載をまとめたものですが、連載の最後は成田先生の愛読書『郷愁記』の地、アグラへの訪問でした。『郷愁記』はいまでは絶版になっており、本屋に行っても手に入りません。5月の「追悼展」前にはちゃんと読んでおかなければとインターネットで注文すると、すぐに古本が1冊手に入りました。便利な時代ですね。

1930年代の話です。杉正俊さんという京都大学出身の若手哲学者の日記です。ドイツで勉強したいという高い志を持って留学したのですが結核を患い、ドイツとスイスのサナトリウムで療養することになります。学問のこと、病のこと、将来のことなどを悩み苦しみ考えた、若手哲学者の日記です。

成田先生の連載の最後の締め、「アグラのサナトリウムに行って、見たことを書くのはどう？」と提案されたのが、奥様の瑛智子様です。お二人で現地へ行かれました。写真の通り、サナトリウムは廃墟です。ですがこのときはまだ壊されないままかろうじて残っているところで、『郷愁記』の杉さんが散歩で通った道を歩き、ベンチに腰掛けた。それが写真の成田先生の姿です。

この話を紹介して締めくくろうと思い、ご家族の方がもし来られるようでしたらコメントをお願いしたいと思っていました。しかし暑い中だしご来場は難しいだろうと思っていたら、奥様と慈子様が出来られ、次女の愛さんもオンライン参加されるとの連絡をいただきました。来られるのなら最後にコメントをと事前に申し上げていたところ、2~3日前に奥様から電話があり、「鮮明に思い出したことがある」とのこと。



この前後のエピソードになるでしょう。成田先生の人柄がすごく伝わるエピソードです。ご披露いただけますか。

成田瑛智子：皆様こんにちは。昨日1日かけて、『郷愁記』と、『サッカーと郷愁と』を読み返しました。アグラへ行ったのが外国旅行の最後になりました。

始めて『郷愁記』に出会ったのは、彼が14歳のころでしょう。そしてアグラを訪ねたのは62年あとです。そしてこの旅が一番感銘深い旅行になりました。

ルガノ湖の古いホテルに泊まったんですけれども、そこにいる古い人たちに聞いても、そのサナトリウムがあるかどうかという情報は全くなくて、わからないと言われました。翌日、バスが1日2便出ているということで、バスに乗ってアグラに行ったんですが、アグラは山の中腹にある小さな村で、そこで土地の人に聞いたら、この先の林の中の小路を下って行くとそこに残っている。だけどもう廃墟だという情報ももらって、そこを訪ねたんです。そうすると、高い崖の突端に、まるで幽霊屋敷みたいに、すっかり窓ガラスが割れ、壁も天井も落ち、だけどそこに建っていたんですね、サナトリウムが。

そしてたまたまそこに車でやってきた、この土地に住んでいるご夫婦に会うことができました。そうしたらその方は、サナトリウムにいろんな食品を運んでいた人で、サナトリウムは経営がダメになって1968年に閉鎖し、そのまま放置されて来た。最近になって、実業家がこのあたりの土地を購入し、間もなく取り壊しが始まり、何か別の施設ができるという話でした。本当にギリギリのチャンスで、現状が残っているところで訪ねることができました。恵まれたというか、私たちが待っていてくれたのだという感じがしました。

「中は危険だから立ち入り禁止」と言われたんですけれども、誰もいなくなったときに中に入りました。そして杉さんが入っていた病室とか、テラスとか、日光浴をした場所とか、そういうところを見て回って、それからサナトリウムの窓からの景色と、サナトリウムの外から見たルガノ湖など、本に書いてあるとおりの景色を見ることができて、彼はものすごく感動していて、そこで数時間を過ごしました。

その時の旅行のことを記録したものをもとに思い出していたときに、全くどこにも書いていないんですけれども、すごく鮮明に思い出したことがあります。小さなできごとなんですけれども、それをちょっとお話ししたいと思います。

日本を当日の朝発って、その日のうちにチューリッヒに着いたんですね。ホテルに行ったのがまだ夕方4時でした。明るいのでチューリッヒ湖の周辺を散歩したんです。賑やかな通りを外れていくと、チューリッヒ湖のすぐ近くまで行けるので、そこへ歩いて行っていたときに、急にすごい雨が来ました。土砂降りの雨で、もうそこから動けなくなって、それで、小さな木の下に、傘をさして立っていたんですね。

雨が止むのを待っていました。そういうときに観光客なんかはみんな一斉にお店に入って、もう誰もいなくなって、しんとしていたんですが、そのときにちょっと横を見たら、10メートルくらい離れたところに、6、7人の若者のグループがいたんです。そのグループというのは、なんかちょっと目つ



きが悪いというか、不良っぽいグループで、それでこちらをジロジロ見てるので、いやこれはなんかちょっと危ないな、もし取り囲まれたら、脅迫されてもどうしようもない。もう他の観光客も、この土地の人も、一人も見えないので、危険を感じるような状況だったんですが、そのときそのグループのリーダー格らしい人が、一人で私たちのところに近づいてきたんです。すぐそばまで来たとき、彼がさしていた傘をさっとその人の上にさしてあげたんですね。自分は濡れて。

傘を持たずに来たその人に傘を差し掛けて、自然体で、穏やかな声で話しかけたんです。ドイツ語ですから私はわかりません、何を話しているか。そうすると、その話しかけに若者が答えて、それから数分間話をして、その後で話が途切れたところで、彼はグループに戻っていったんですね。それでそのグループが、ちょうど雨も上がりかけたときで、何事もないように遠くへ去っていったという、そういうことがありました。

そのときはほっとしたんですけれども、もう彼は何事もなかったように自然な感じで、きれいに晴れた空の下を、街の方へ一緒に戻っていったんですけれども、そのときの状況が本当に鮮やかに思い出されたので、そのお話をさせていただきました。

中塚：どうもありがとうございます。この情景を思い浮かべることができたでしょうか。

私はこの話を電話で始めてお聞きしたとき、想像力をものすごく働かせて、そのときの様子を思い描きました。そうすると成田先生の、生前のお人柄、自分が接した範囲ですけれども、それがなお蘇ってくる。そんな思いのするエピソードでした。

奥様がこのエピソードを鮮明に思い出したということをお電話でお聞きして、最後にぜひその話を紹介してくださいとお願いした次第です。どうもありがとうございます。

去年、成田先生が8月7日に亡くなりました。コロナということもあってご家族で葬儀を済ませられたことを、数日後にお手紙で知りました。私は手紙をしたため、翌日、成田先生のお宅にお持ちしたのですが、そのご返事を奥様から葉書でいただきました。

成田先生の最後の様子が、奥様の言葉で記されていました。最後に紹介させてください。

主人は今年1月末から体調を崩し、
途中6週間の入院がありましたが、
あとはずっと自宅で、
最後の40日間は起き上がりませんが、
しっかり病に向き合って、
命を使い切って、
家族が見守る中、
穏やかに息を引き取りました。

『郷愁記』の思いでしょうか。やれることをすべてやって、命を使い切ってということでした。

成田十次郎先生、ありがとうございました。安らかにやすみください。

ということで、この会も締めたいと思います。

ご登壇されたお三方から、全体を通して、成田先生への思いなどをお話いただければと思います。

今度は、真田さん、竹下さん、柴田さんの順でお願いします。

真田：成田先生の生きざまを改めて振り返りまして、本当に研究にしっかり没頭されつつも、社会全体のことを考えていらっしやっただんな、ということ改めて実感しました。本当に真っ直ぐな生き方と言いますか、大事なものを学ばせていただきました。本当にありがとうございました。



竹下：成田十次郎先生のお名前は、毎年秋に高知県中学校サッカー選手権大会をやっておりまして、その優勝チームにいま成田杯を授けており、いまでも残っております。

ご紹介された映像は私が編集したのですが、奥様のインタビューが多かったのにお気づきでしょうか。10年前に作った時のタイトルは「妻が語る成田十次郎」というテーマです。成田先生の生涯なんですけど、節目で奥様のインタビューが入り、それを再編集した格好で紹介しております。

インタビューの最後に川淵三郎さんがこうおっしゃいました。「成田十次郎さんの最大の功績は、デットマール・クラマーさんを見つけて日本に連れてきたことだ」と。当時の幹部はクラマー招聘に反対してるんです。ところが成田先生が、「この人じゃないとダメだ」ということを、当時の会長に上申をして、クラマー招聘につながったのだと。もしこれがなかったらJリーグはなかったらろうし、日本代表がワールドカップで活躍するのはもっと遅れていたというのが、川淵三郎さんのご意見でした。まさにその通りだと思っております。

柴田：私自身、成田先生はどちらかというと学者というイメージで、卒業したあともみておりましたが、今日はまた新たな勉強を、いろいろさせていただきました。

晩年、成田先生と電話でお話をする機会がありました。実を言いますと、「えっ、こんなにまだサッカーに情熱をもちっしやるんだ」ということをお話させていただきたいと思います。世界の強豪国のチームの教本、要するにサッカー教本を日本に集めて、特に一番いいのは筑波大学の学生さんですが、そういう人たちに訳させて、日本に新たな教本を作るべきだと。

このことは、電話をするたびにお話をされておりました。それでだんだん熱が入ってきまして、奥さまから、「サッカーの話をするといつもそうやって熱が入ってきて血圧が上がるからもうやめて」と言われていました。私もしまったなと思いつつながら過ごしたものです。最後そんなことで終わらせていただいて、今日は私自身も新たな勉強になりました。ありがとうございました。

中塚：ありがとうございました。

会場の方からもオンラインの方からも、本当はいろいろお聞きしたいし、いろいろおっしゃりたいことがあるかと思いますが、オンライン側から一件だけ紹介させてください。

神戸から参加されている賀川浩さん。この12月で数え年100歳になられる世界最高齢サッカージャーナリストの賀川さんは、デットマール・クラマーの親友でもいらっしやいました。

賀川さんのコメントです。音声で参加が難しそうなのでチャットでとのこと。

「わしらが記者やクラブのメンバーで考えてきたことを、大学や学校で考えておられたんやな。そら殿堂に入ってもらわないかな」と。関西弁で書いてくださいました。

冒頭申し上げましたが、成田先生のことをより多くの人に知ってもらいたい。来年度のサッカー殿堂に推薦させていただくだけでなく、我々「若手」がそれぞれのフィールドで、成田先生が志したこと、あるいは形にされなかったことをしっかり受け継いでいかなければいけないと思います。若手には、60歳過ぎた私ももちろん含まれます。がんばってやっていかなあかなと、改めて感じました。

長時間にわたりまして、しかも休憩も飲水タイムもなくお付き合いいただき、誠にありがとうございました。この後、この場で水分補給の時間を設けます。用意ができるまで、2階の資料室をご覧くださいながらお過ごしください。この学校の資料が豊富にあります。書籍販売コーナーもあります。またできればアンケートにもご回答いただければと思います。準備ができるまでそういった時間に使用いただければと思います。

本日はどうもありがとうございました。



< 報告書作成 >

文字起こし：吉田優輝（筑波大学大学院）、岡田俊祐・阿部悠真（筑波大学4年）／編集：中塚義実